

フレームアームズガール 《従兄弟の兄さんは地味に凄い人》

アインスト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フレームアームズガールのアニメを見て書いてみようと思った作品です。

もしも源内あおに従兄弟の兄さんいたら……と考え、オリジナルキャラとしてブツ込みました。

なるべくアニメに沿うように書こうと思ってます。

では、どうぞ(*´ω`*)

目次

『轟雷”ちゃん”じゃなくて轟雷”君”!?’』	1
『飛べないステイ子はステイ子でいいのかな?』&『青い旋風が私の部屋にやってきた』	6
『ウルフvsマークII』	20
『お掃除しよう!!』&『ゼルフィカール、源内家に立つ』	26
『マテリア姉妹とダオ兄弟がやってきた』	42
『迅雷、バルチャー参上!!』	61
『お部屋作りは楽しいな』	75
『二つのゼロ(レイ)』	91
『アーキテクト&セカンドジャイヴ起動』	98
『愉快なおつかいレース』	114
『感じて花火大会』	126
『学校への潜入任務』	138
『三人のフレズヴェルク』	150
『スペクターシステムに関する考察』	164

『轟雷” ちゃん” じゃなくて轟雷” 君”!?’』

朝。

今日は休日だからゆっくり過ごそうかな〜…………。

あ、皆さんこんにちは。

源内あおです。

つい最近に『フレームアームズガール』というロボット?が私の部屋にやってきたの。

なかなか個性豊かな子でさ。

轟雷「あお、あお。白米が炊けましたよ」

あお「あー、うんわかった。ちよつと待ってて〜」

轟雷「一応よそつて置きましたが…………量はこれぐらいでどうですか?’」

あお「いいね〜、丁度いい感じ」

身長15cmくらいで自分の身長よりも大きなしゃもじを抱えた子、この子が『轟雷』。

なんでも轟雷が起動したのが私だけっていう事でかなり注目されてるんだつて（by轟雷）。

テーブルの上の充電くんの上で寝ている子が『バーゼラルド』。

一見おちやらけているように見えるけど実は頭がいい子。

そして、充電くんの上に腰かけて自分の装備を手入れしている子が『ステイレット』。

意外とプライドが高い子で、一度轟雷に負けてからはライバル心を燃やしてるんだつて。

さて、朝ごはんを食べ終わると轟雷がテーブルの上で私のちっちゃい頃のアルバムを見てる。

轟雷が私の部屋に初めて来た時は『何故?』とか『これは何?』つてよく聞かれたな〜。

轟雷「あの、あお」

あお「ん？どうしたの？」

轟雷「この写真に写っている男の人は誰ですか？」

あお「それ？あー……その人は私の従兄弟のコウタ兄さんだよ」

轟雷「従兄弟……とは何ですか？」

あお「えー？難しい質問だなく……うくん」

轟雷「答えるのが難しいのですか？」

あお「まあ簡単に言っちゃえば親戚のお兄ちゃんかな？」

轟雷「なるほど……」

あ、コウタっていう人は私の従兄弟の兄さんで、機械とかの修理とかが得意なんだって。

今頃何してるかな……。

ま、そのうち連絡くれるでしょ。

……つてまたやつてるよステイ子ったら。

あ、ステイ子っていうのはステイレットのあだ名だよ。

あだ名で呼んだらたまに怒られるけどね……。

というかちっちゃいロボット？に怒られる私っていったい……。

まあそんなステイ子にも弱点みたいな面白い所もあるんだけどね。

バーゼラルド（以下バーゼ）「すびい……」

ステイレット（以下ステイ子）「アンタそろそろ起きなさいよ

……」

バーゼ「うくん……もうちよつと……」

ステイ子「まったくアンタは……!!」

轟雷「まあまあいいじゃないですかステイレット。そういう所は大目に見てあげましょうよ」

ステイ「それは……そうだけど……」

そんな他愛のない話をしていると、一本の電話が。誰からだろう？

ああ「ごめん轟雷、ちよつと電話が……」

轟雷「わかりました」

ああ「ごめんね、ありがとっ」

携帯を手に取り、通話モードにする。

するとすぐに聞き覚えのある声が聞こえた。

ああ「もしもし?」

『よー、元気してつか〜?』

ああ「え、コウタ兄さん!」

コウタ『おー、覚えてくれてたのか。俺は嬉しいよ』

ああ「どうしたの?」

コウタ『いやな、面白いもん作ったからさ。そろそろそつちに届くと思うんだが』

ああ「面白い物?」

電話で話していると、玄関から物音が聞こえる。

何か箱のような物が落ちたような、そんな感じ。

携帯を耳にあてながら玄関まで行き、カギをあけて扉を開く。

すると轟雷たちが来たときの箱よりちよつと大きめな箱が落ちてた。

さつと拾い上げて私の部屋に持っていく。

ああ「ねえ、今届いたんだけどこれ何？」

コウタ『まあ開けてみる。面白いもん見れるからよ。あ、そろそろ時間だから切るわ。そんなじゃ』

ああ「え、あ、ちよつと!？」

何かを聞く前に通話が切れる。

………いったい何なんだろう？

轟雷「ああ、その箱は何ですか？」

ああ「わっかんない。とりあえず開けてみるね〜」

ステイ子「なんか大きくない？」

バーゼ「箱の中身はなんだろうなく♪」

ああ「よい………しよつ、と………ダンボール箱から黒い光沢のある箱………どゆこと？」

轟雷「あ、ここから開きそうです。開けてみますね」

轟雷が黒い箱を開けると………

箱の中には轟雷に似た装備を身につけたちよつとゴツいロボットが入ってた。

それからすぐにロボットの目が光って起き上がり始めた。

ウルフ「轟^{ウエアウルフ}雷、正常に起動………システム、オールグリーン………

問おう、君が私の主君か？」

ああ「え、主君？」

轟雷「恐らく私たちで言うところのマスターですよ」

ああ「あー………多分そうなるかも？」

ウルフ「そうか」

轟雷「あの、貴方は？」

そう轟雷が聞くとそのロボットは轟雷たちの方に向き直り、こう答えた。

ウルフ「私は轟雷。別名ウエアウルフと呼ばれている」

轟雷「轟雷……ウエアウルフ……？」

ステイ子「つまり、轟雷は轟雷でも違う方の轟雷って事？」

バーゼ「訳わかんない……」

ウルフ「呼びやすいように呼んでくれて構わない。その方が判別をつけやすくなるだろう？」

あお「じゃあ……ウルフ君で！」

轟雷「何故ウルフなのか？」

あお「だって、ウエアウルフって呼ばれてるんでしょ？だったら、略してウルフって呼んだらどうかなくって」

ステイ子「アンタらしい考え方ね……」

バーゼ「でもでも、カツコいいよ」

ウルフ「了解した。ではこれからはウルフと名乗ろう」

あお「ちゃんと轟雷たちと仲良くしてよ？」

ウルフ「重々承知している」

外国にいるお父さん、お母さん。

私の部屋にまた新しい住人が増えたよ。

これからも楽しくなるかも。

『飛べないステイ子はステイ子でいいのかな?』&『青い旋風が私の部屋にやってきた』

『飛べないステイ子はステイ子でいいのかな?』

――深夜。

私はトイレに行きたくなって目を覚ました。

トイレに行こうとすると足元から『パキツ』って音がした。

ああ「んえ……?」

……ま、いつか。

朝。

轟雷「ああ、白米の量はこれぐらいでどうですか?」

ああ「うん、いい感じ。ありがとう轟雷。あ、お米ついてるよ。取ってあげるね」

轟雷「すみませんありがとうございます」

朝食をテーブルまで運び、食べ始める。

うん、美味しい。

ああ「あ、そういえばステイ子、ここに住むの?」

ステイ子「……」

あれ、なんかステイ子がジト目で見てくるんだけど……。

ああ「何その目？」

ステイ子「…………ステイ子？」

ああ「そうステイ子！ステイレットじゃ長いと思っただからさ。それで、どうなの？」

ステイ子「あたり前よ、轟雷に負けっぱなしで帰るなんて私のプライドが許せない!!」

ああ「そっか……………うちはペット禁止なんだけど……………まあ食費がかかる訳じゃないからいつか」

ステイ子「私たちを追い出そうとしてもむd……………わぷっ!？」

轟雷「あ、すみません」

ステイ子の頭の上に大量なお米が。

轟雷が理由を話す。

轟雷「ああがあまりにも美味しそうに食べるのでまだいけるかと思いまして……………」

ああ「うんうん、まだいけるよ。ちなみにこのお米は親戚のおじさんが送ってくれる……………」

ステイ子「ちよつとアンタたち!!米乗つけられた私を挟んで何おしやべりしてんのよ!？」

轟雷「あ、すみません。お米取りますねステイレット」

轟雷がステイ子の頭についたお米を取ろうとすると……………

ステイ子「…………!？」

轟雷「よいしょ……………」

まるで石みたいに固まっちゃった。

どうしたんだろう？

ステイ子「……………」

轟雷「…………ステイレット？」

あお「どうしたの？」

ステイ子「わ、わからない…………身体が動かないのよ……………」

轟雷・あお「「えっ?」」

ステイ子「どうして……………」

バーゼ「それはトラウマだねっ」

バーゼが寝転がりながら口を開いた。

ただ、聞き慣れない言葉が出てきたから轟雷は改めて聞く。

轟雷「トラウマ、とはなんですか？」

ウルフ「トラウマというのは人間的に精神状態が一時的に錯乱状態にあり、これにより……………」

バーゼ「長ったらしい説明はいいよ。まあ簡単に言っちゃうとね、心の傷だよ。ステイレットは轟雷に負けたのがスツゴい嫌だったんだよ。だから、胸の中や頭の中がもよもやく、ぐちゃぐちゃくつてしちゃって、傷んじやったの」

轟雷「なるほど……………」

あお「バーゼ、アンタホントは頭いいでしょ」

バーゼ「え〜?」

私は知らないよ、と言わんばかりにしらばっくれるバーゼ。

なんか地味にムカつく……………。

ステイ子「そ、そんな…………私が…………トラウマ…………!?轟雷の

…………轟雷のせいでええええええええ!!」

轟雷「どうしましょう…………?」

ステイ子「いやいやいやあり得ないから、そんなの絶対あり得ないから!!」

するとバーゼが轟雷を前に押し出し、ステイ子の真ん前まで近づける。

すると……。

ステイ子「(ガチーンッ!!)」

石のようにまた固まっちゃった。

バーゼ「にやっははははは!!やっぱそうだよ」

あお「ガツチガチだねえ」

ステイ子「違うってばあ!!」

バーゼ「えく?だってさあ」

バーゼはまた轟雷をステイ子に近づけようとする。

ステイ子「ちよっ……やめてよ……」

バーゼ「じゃあトラウマだつて認める?」

ステイ子「み……認めない!!充電くん!!」

充電くんを呼び出し、アーマーパーツを装着する。

そして飛ぼうとするけど……。

ステイ子「よっ……きやあっ!?!」

飛べずに落ちてしまう。

ステイ子「え……飛べない……?」

ウルフ「ふむ、トラウマがここまでとはな」

轟雷「もしかして……………」

バーゼ「これもトラウマのせい？」

ステイ子「そんな……………まさか……………」

でもいったい何がダメなんだろう？

ああ「どういう事？」

轟雷「深刻な問題です。私達には共通の汎用制御人格プログラムの他にそれぞれの個体に特化した戦闘用プログラムがインストールされています。ステイレットの空中戦に特化したシステムがトラウマによつて機能障害を起こしてるのかも……………」

ウルフ「確かに、少々よろしくないな」

ステイ子「飛べない私なんて……………ただの……………」

ウルフ「一瞬ある動物の鳴き声が聞こえた気がするのだが」

バーゼ「それは気にしちやいけないよ」

ウルフ「ふむ、ならば早急に手を打たねばな」

バーゼ「ステイレットのく、トラウマ克服く!! 作戦開始く、いえく

い!!」

箸を持つてお茶碗を叩くバーゼ。

行儀が悪いと思うんだけど……………。

ウルフ「バーゼラルド、少々行儀が悪いぞ」

バーゼ「あ、ごつめくん」

ウルフ「まったく」

という訳で早速ステイレットのトラウマを克服するべく行動開始。
私は言われた通りにやってみる。

ステイ子「どういうつもり……………?」

バーゼ「まあまあ慌てない慌てない」

あお「じゃ、行くよ〜」
バーゼ「ゴーゴー!!」

バーゼの掛け声と共に轟雷が乗ったセッションベースを押して、ステイ子の近くまで近づける。

あお「おっ、結構大丈夫じゃんステイ子」
バーゼ「もうちよっで行ってみよ〜!!」

徐々に近づけ、最終的にはセッションベースを接続。だけどやっぱりまだステイ子はダメみたい。

あお「あれ、でもここからどうしたらいいの?」

バーゼ「うくとねえ、わかんない!!」

ウルフ「とりあえず考える事にしよう。三人かどうかわからんがこ
とわざで『三人寄れば文殊の知恵』と言うだろうか?」

バーゼ「そうだね〜、う〜ん……」

あお「う〜ん……あ、そうだ!!」

ウルフ「何か良い案でも?」

あお「いやトラウマつてさ、ショック療法で治るんじゃないか
つ
け?」

バーゼ「うん、そこで何かガツンと衝撃的な事したら!!」

すると轟雷は何か思い付いたみたい。

轟雷「ツ!!」

同時にセッションベースが起動し、発光する。

轟雷「轟雷!!」

ステイ子「ス、ステイレット!!」

轟雷・ステイ子「フレームアームズガール、セッション!!」

轟雷「GO!!」

ステイ子「み、見てなさい!!」

二人が転送され、アーマーパーツをそれぞれ装着する。

轟雷「導きます……貴女を!!」

バーゼ「わー、セッションコールしちゃったく!!」

ウルフ「いったい何をするつもりだ……?」

ステイ子もアーマーパーツを装着し終える。

ステイ子「ス、ス……スパークング!!」

ステージは前に轟雷とステイ子が戦った砂漠ステージ。

ステイ子はその時のバトルを思い出したのか怖じ気ついでしまう。

あお「どういうつもりなんだろう轟雷?」

バーゼ「さあ?でも面白そう!!にやはははは!!」

ウルフ「ずいぶんと気楽だな……」

轟雷がステイ子の元にじわじわと近寄る。

だけどステイ子は脚を震わせて膝をついてしまう。

大丈夫かなあ……。

あ、轟雷がステイ子の顔を上げた。

轟雷「……ステイレット」

ステイ子「……?」

すると次の瞬間!!

轟雷「……………んっ」

ステイ子「?!?!」

あお・バーゼ「おおう?!」

ウルフ「……………なるほど」

なんと轟雷がステイ子にキスをしちやっただけ、
え、どういう事お!?

ステイ子「……………っ、んんっ……………!?!」

轟雷「……………」

みるみるとステイ子の顔が赤くなる。

そりやあもうトマトみたいに。

しばらくするとステイ子の頭の中がショートしてしまっただけ、
で、止める手を離れた。

轟雷「……………ふう。あお、ショック療法とはこんな感じで良かった
でしょうか?」

あお「あれ、もしかしてなんか私知らないアドバイスしちやっただけ……?」

バーゼ「にやっはははは!!」

ウルフ「ふむ、これが俗に言う『百合』という物か」

あお「ちよっ、ウルフ何処でそんな言葉覚えたの!?!」

ウルフ「いや、ちよっとな」

ステイ子は気絶したみたいで、ライフゲージがゼロになった。

『Winner 轟雷』

バーゼ「あくあ、ステイレットの回路、吹っ飛んじやっただけ
あお「これでこじらせちやったらどうしよう……………」」

ウルフ「その心配はないと思うぞ」

あお「そうなの？」

ウルフ「恐らく、だがな」

すると充電くんが私の服を引つ張る。

充電くんの手にはステイ子の脚のウイングパーツがあった。

ウルフ「む、これは……」

轟雷「これ、破損してますね。だからステイレットは飛べなかったんです」

あお「えっ？」

轟雷「どうやら上から何らかの力が加わって破損してしまっただけです」

あお「上から……？あつ」

ウルフ「何か心当たりでもあるのか？」

あお「ごめん、それ私だ……」

ウルフ「仕方あるまい、ステイレットが目覚める前に修復しよう」

それから数分後。

ヒビが入っていたウイングパーツが綺麗に直った。

それと同時にステイ子が目を覚ました。

ステイ子「ん……あれ、私……何を……？」

バーゼ「何も覚えてないの？」

ステイ子「確か……バーゼが私のトラウマ克服作戦とか言っ……轟雷とセツシヨンベースに乗ってどンドン近づけて……あれ？それからどうしたんだっけ……？」

ウルフ「ふむ、どうやら本当に何も覚えていないようだな」

バーゼ「あちやく……」

轟雷「……ステイレット、飛んでみて下さい」

ステイ子「え……でも……」

轟雷「ステイレットはもう大丈夫です」

ステイ子「大丈夫……？」

轟雷「はいっ!!」

ウルフ「騙されたと思って飛んでみる、ステイレット」

ステイ子「……わかった、やってみる。けど、別にアンタ達の言葉を信じた訳じゃないからね!!」

轟雷「はいっ!!」

ステイ子は早速アーマーパーツを装着し、飛ぶ。
どうやらちゃんと飛べるようになったみたい。

ステイ子「飛べた……!!良かった……良かったよ……!!」
ウルフ「うむ、結果オーライだな」

ステイ子は自由自在に飛び回る。
それほど嬉しかったんだね、ステイ子は。

ああ「ステイ子、良かったね」

バーゼ「にやつははく、まあパーツを修理したから当たりm」

ウルフ「少し黙っておけ、バーゼラルド」

バーゼ「うむむ……」

ステイ子「私はトラウマを乗り越えまた一つ強くなった!!私偉い、私強い!!」

ウルフ「(人、それは『自画自賛』と言う)」

ステイ子「轟雷!!早速私とバトリなさああああい!!」

ステイ子は轟雷の元に飛んでいく。

けど轟雷の唇を見たとき勝手に急停止した。

さらに追い討ちをかけるかのようにステイ子の顔がどんどん赤くなつた。

ステイ子「なっ、ななな何……？？？どういう事……？？？なんでこんな……？」

轟雷「ステイレット？」

ステイ子「(ガチーンツ!!)」

あれ、また固まっちゃった。

バーゼ「ほほぅ……？」

あお「いやあこれは……」

あお・バーゼ「おもしろ〜!!」

ウルフ「……ステイレット、強く生きろ」

ステイ子のトラウマがまた一つ増えちゃったみたい。
ま、それはゆっくり治せばいいよね。

『青い旋風が私の部屋にやってきた』

日曜日。

せつかくの休日だからゆっくりしようつと。

轟雷はウルフと一緒にいたい。

なんか兄妹みたいだなあ。

ウルフ「……よし、ナイフはこんな所か」

轟雷「凄い……鏡みたいに反射してますよ」

ウルフ「綺麗に磨けばこんな物だ」

轟雷「私にも教えてくださいウルフ!!」

ウルフ「わかった、じゃあまずは……」

……もう兄妹でいいんじゃないかな？

バーゼとステイ子は……あ、またやってる。

バーゼ「すぴい……」

ステイ子「アンタそろそろ起きなさいよ……」

バーゼ「むにやむにや……もうちよつと〜」

ステイ子「いい加減にしなさいこの寝坊助!!」

ステイ子がバーゼの充電くん(ベッドモード?)を蹴り飛ばし、バーゼもろとも蹴っ飛ばした。

バーゼ「いたあい!!もう、やめてよステイレット!!」

ステイ子「いつまでも寝てるアンタが悪いんでしようが!!」

バーゼ「うむむ……!!」

仲が良いんだか悪いんだか……ま、『喧嘩するほど仲が良い』って言うから大丈夫かな。

すると玄関から何かが落ちる音が。

ちょうど箱が落ちるような……ちよつと見てこよう。

ああ「……うわ、いつぞやの大きめな箱……また兄さんからかな?」

そう言っって箱を持ち上げる……って!?

ああ「ちよつ、重た……!?何入ってんのこれ!?!」

苦労しつつ私の部屋に持っていく。

で、箱を開けるといつぞやの黒い大きめな箱と轟雷達のサイズで

ちよつと大きめなトランクが2つ。

何これ？

あお「やつぱり差出人は兄さんか……まあいいや、開けてみよ」
轟雷「また何か入っていたんですか？」

あお「うん。いったいこれはなんd」

???「イヤツハアアアア!!」

黒い大きめな箱からいきなり何かが飛び出す。

姿を確認すると、ステイ子に似ている……けど見たこと無い武器
みたいな物を身に着けている。

なんともゴツくはないけどスマートなロボットが出てきたみたい。
もしかしてこの青いロボットも……

ウルフ「む、お前はステイレットか？」

ステイレット「おうとも、ただしただのステイレットじゃねえ。

スーパーステイレットだ!!」

ウルフ「……マークIIでいいな？」

ステイレット（以下マークII）「はあっ!?なんでだよ!？」

ウルフ「スーパー、というなら二番目の強化なのだろう？」

マークII「そりゃあ……そうだけだよ……」

ウルフ「ならばマークIIで決定」

マークII「うーい……」

あお「ちよつと待つて待つて、え、どういう事？」

轟雷「恐らくステイレットとは別のステイレットなのでしょう。自
分からスーパーステイレット、と名乗っていましたし」

ステイ子「でもマークIIってウルフが呼んでたし……マークI
Iでいいんじゃないの？」

バーゼ「そだね。じゃあマークIIでけつてくい!!」

という訳でスーパーステイレットのあだ名は『マークII』で決定

してみたい。

するとマークIIはウルフにこんな事を言い出した。

マークII「ウルフ、俺とバトルしようぜ!!」

ウルフ「ふむ、いいだろう」

あお「え、フレームアームズもバトルするの!?!」

ウルフ「ああ。まあ戦い方は少々違うが」

あお「へ?」

いったいどんなバトルをするんだろう………?

『ウルフVSマークII』

『ウルフVSマークII』

あお「ねえ、どうやって戦うの？」

ウルフ「まず従来通りセッションベースを使用する」

マークII「んで、この……トランクを開いて、好きなアーマーパーツ、武装を選ぶ」

轟雷「なるほど、私達は装甲パーツを装着して行きますがあなた方は装甲パーツと武装を自分でチョイスできるのですね」

ウルフ「……よし、選択完了だ。マークII、お前は？」

マークII「俺も準備OK。いつでもいいぜ」

そう言つてウルフとマークIIは自分で選んだ装甲パーツをベースにつけていき、最終的にベースの中央に立つ。

そして、セッションベースが光り出す。

ウルフ「では……」

マークII「ああ」

ウルフ「ウルフ!!」

マークII「マークII!!」

ウルフ・マークII「フレームアームズ、セッション!!」

ウルフ「発進!!」

マークII「行くぜ!!」

ウルフとマークIIは何処かに転送され、ベースに取り付けられていた装甲パーツとも消えてった。

ウルフ「アーマー装着……漸雷強襲型、発進準備完了!!」

マークII「システム、オールグリーン!!ステイレット、テイクオ

フ!!」

そして、フィールドの様子が投影される。
あれ、これって市街地?

轟雷「市街地フィールドですか……」

ステイ子「戦い方によってはキツイ戦闘になりそうね」

バーゼ「でもでも、ウルフの装甲パーツがだいぶ違うみたいだよ
〜?」

あお「あ、ホントだ……あれってマント?」

轟雷「マントではありませんが、あれは防弾性が非常に高い特殊マ
ントです」

ステイ子「なるほど、だから”強襲型”なのね」

バーゼ「ウルフが持つてる武器は……何あれ、ガトリング?」

轟雷「ツインガトリング、と言ったところででしょうか?」

ステイ子「見たまんまの名前じゃない……で、背中に取り付けて
いる武器はミサイルコンテナ?」

バーゼ「ぷぷぷ、よく見なよステイレット。あれは折り畳まれ
たライフルだよ」

ステイ子「え、うそっ!?!」

轟雷「肩に装着している小さなコンテナがミサイルコンテナなんで
しようね」

ステイ子「箱みたいに折り畳めるライフルってある?普通に考え
て」

あお「あー……多分兄さんお手製の武器じゃないかな」

轟雷「つまりオリジナルの武器、と?」

あお「そゆこと」

そうこう話しているうちにウルフが動いた。

本格的に攻めるのかな?

ウルフ「目標……捕捉。ミサイルによる牽制を開始。発射アツ!!」

ウルフがそう言うと、コンテナのフタが開いてたくさんミサイルが発射される。

「小さいのに大容量だなあ。」

マークII「やっぱ最初はミサイルで攻めて来やがったか……だが、無駄ア!!」

あお「ねえ轟雷、マークIIの持つてるあの武器はなんて言うの?」

轟雷「あれはACSクレイドルです。増加装甲、推進機、機関砲、ブレードを合体させた多機能ユニットなんです」

あお「ほえ、扱いが難しそうな武器だねえ」

轟雷「はい。ですがマークIIは優秀な機体のようです。即座に状況を判断し、最適な武装を選んでいきます」

バーゼ「あ、見て見て。マークIIがたくさんミサイル全部撃ち落としちゃった!!」

あお「うわ、すごっ!!」

ミサイル全部が撃ち落とされたのを見てウルフは諦めたのか、ミサイルコンテナを排除、外しちゃった。

大丈夫なのかなあ?

ウルフ「やはり只ではいかんか……なら」

ウルフは背中のライフルを展開して、構える。

そしてじっくりと狙いを定めて……。

ウルフ「まずはその装甲を削ぐだけだ」

その一言を口?にした後、ライフルで撃つ。

放たれた弾はまっすぐマークIIの腕の武器、ACSクレイドルを一つ壊した。

マークII「うおっ!?マジかよ……相変わらず化け物染みてんな
ウルフの奴……」

ウルフ「……次、右脚のクレイドルを頂く」

マークII「どわったあ!?クツソあんのやろ……今に見てやが
れ……」

ウルフ「……ん?場所を変えたのか……?だがレーダーには反
応が無い……」

ウルフはふと上を見る。
すると。

マークII「俺はここだああああ!!」

ウルフ「何っ!?!」

あお「あれ?マークIIのクレイドル……だっけ、あれ壊れたん
じゃないの?」

ステイ子「違う。左脚に残っていたクレイドルを右腕に取り付けた
のよ」

バーゼ「あーゆー武器には互換性があるからね」

あお「え、そんなのアリなの?」

轟雷「はい。アリです」

あつという間にウルフのライフルが壊された。

油断してたのかな?

ウルフ「チイツ……だが、この距離ならば!!」

マークII「あ?おわっ!?バカ肩掴むな!!」

ウルフ「離さん!!零距离で食らうがいい!!」

ホント、兄妹みたいだなあ……。

ウルフ「大丈夫だ。お前にはお前にしかできない戦いがある」
轟雷「……はいつ!!」

マークII「どよステイ子、カツコよかつただろ」

ステイ子「微妙。負けたのにどうしてそんなに清々しいのよ?」

マークII「おやあ? もしやアレですかあ? プライド高い系の
FAガールつすかあ?」

ステイ子「ぬなっ!!」

マークII「おー? 凶星つすかあ?」

ステイ子「こいつ……バーゼの次にうざい……!!」

マークII「なははは、そいつ褒め言葉つすよステイ子ちゃん」

ステイ子「ぐぬぬ……!!」

バーゼ「やりますなあマークIIさんや」

マークII「いやいやバーゼちゃんには敵わないつすよ」

なんだろう、二人を一緒にしたらヤバいかも。

まあ、面白い事には変わりないけどね。

ステイ子「頭痛くなる……」

マークII「ほほ、自分の行いでつすか?」

ステイ子「アンタねえ!!」

マークII「だっつはははは!! 逃げるが勝ちでえっ!!」

ステイ子「ちよっ、待ちなさああい!!」

『お掃除しよう!!』&『ゼルファイカール、源内家に立つ』

『お掃除しよう!!』

長い学校の授業が全て終わり、私は家に帰る。
ある物を小脇に抱えて。

ああ「たっだいま〜!!」

轟雷「あ、おかえりなさい。ああ」

ああ「はいこれお土産!!」

私が床に置いたある物、というのはルンバに近いお掃除ロボット。
するとバーゼが不思議に思ったのか、こんな事を。

バーゼ「何この丸いの、マカロン?」

ああ「そうそう、これが噂の巨大マカロンってね……って違あう
!!お掃除ロボだからこれ!!」

轟雷「お掃除ロボ?」

バーゼ「ほほお〜?」

ああ「管理人さんが使わないからってくれたの。ほら、うちって汚
いじゃん?」

轟雷「普通に掃除をすれば良いのでは?」

ウルフ「同感だ。私の元主君、コウタでも掃除をしていたぞ」

ああ「いやいや、そんな事したらこの子の存在意義を奪う事になる
でしょ?それはやっちゃダメなヤツでしょ?誰だって誰かのために
生まれてきたんだよ」

マークII「うわ、屁理屈じゃねえか」

ああ「別にいいでしょうが……」

轟雷「誰かのために……」

ああ「そう、今この瞬間!!このお掃除ロボは私のためにここに
いるっ!!」

轟雷「なるほど……!!」

おい、轟雷が目を輝かせてるよ。
よし、これなら……。

バーゼ「にやははははは!!あおなんか良い事言ってる風!!」
ステイ子「轟雷が完全に丸め込まれているわね……」

あお「あ、そうそうちなみに今轟雷が私に感じている気持ちが私への”感心”と”尊敬”ね」

轟雷「これが……”感心”と、”尊敬”……?」

ウルフ「轟雷、騙されるな……ある意味違うから……」

ステイ子「ねえ、轟雷の感情データってあおに任せて大丈夫なの?」

バーゼ「さあ?」

マークイー「だが過半数はあれだな、任せられない気がするな」

ステイ子「同感」

あお「つて事で、修理お願いね」

ステイ子「えっ、修理!」

あお「実はこれ、壊れてるんだよね」

マークイー「おいおい、ちゃんと確認しろよ……」

するとバーゼはお掃除ロボを軽く叩き始める。

バーゼ「お〜いお掃除ロボちゃん、入ってますか?あ、ホントだ、うんともすんともだよ」

ウルフ「返事する訳がないだろうに……」

あお「私今から武希子と遊びに行ってくるからさ、その間にちよちよいつとよろしくね!!」

ステイ子「ちよつと、これずいぶん古い型じゃない!!私たちが生まれるうんと前のヤツよ!」

轟雷「ですが、きつとこのお掃除ロボは私に修理されるために生ま

れてきたのかもしれませんが……」

ステイ子「ちよつとちよつと!?何それえ!?何変なスイッチ入っちゃってんのよ!?!」

バーゼ「あおに影響されちゃったんだね」

マークII「間違いねえ、影響されたな」

轟雷「わかりましたあお!!私たちが修理してみます!!」

しかし……。

バーゼ「でもさ、もうとつくの昔に遊びに行っちゃったよ?」

ウルフ「行動が速いな。流石女子」

ステイ子「そんな事言ってる場合じゃないでしょまったく……あおつてば私たちがいったい何だと思ってるのかしら」

轟雷「信頼してくれているのでは……?」

バーゼ「甘えてるんだね」

ウルフ「きつとそうなのだろうな」

ステイ子「人間がフレームアームズガールに甘えるってアリな訳?」

轟雷「もともとあおは甘えん坊な所があったようです……以前見せてもらったアルバムでもご両親にべつたりな写真が多かったです」

バーゼ「なくんだ、だからあおつてば夜中に時々枕にほっぺすりすりしてたんだ!!ぷぷぷ」

ステイ子「えっ、何それ!?!」

バーゼ「なんかさ、にやくにやう言いながら枕にすりすりしてるの。バーゼ見ちゃった」

轟雷「枕に甘えているのでしょうか?」

すると耐えきれなかったのかステイ子とマークIIが吹き出す。

ステイ子「あつははははは!!ウケる!!」

マークII「だ〜っはっはっはっ!!ひ、ひ〜っ、腹イテ〜っ!!」
バーゼ「あ、そうそう後ね、ポエムが甘いんだよ」

ステイ子・マークII「ポエム?」

轟雷「ポエム……」

バーゼ「あおつてね、ポエムノート持つてるの。こないだ見たんだ
けど〜」

ステイ子「勝手に見たの?」

バーゼ「うんっ!!」

ステイ子「うんつてそんなはつきりと……」

すると轟雷が言いづらそうに口を開く。

轟雷「あのお……そのポエムノートつて、表紙に青いリボンと
レースがついているノートですか……?」

バーゼ「そうそう〜」

轟雷「それ……私も見てしまいました……」

ステイ子「えっ?」

轟雷「感情を学ぶためのデータとして収集できる物はないかと探し
ていた時に……そこにちよつとしたポエムと……」

マークII「ポエムと?」

ステイ子「何があつたのよ?」

轟雷「オリジナルの……さ、サインの練習のような物が書かれて
いました……」

轟雷がそう言ったとたん、ステイ子が赤面する。

ステイ子「サインの練習〜!?はっ、恥ずかしい〜!!」

バーゼ「やるよね〜、サインの練習っ。アイドルに憧れた時とかさ
〜」

マークII「あー、確かにな」

ステイ子「わ〜っ!!」

ウルフ「それで、気になるポエムの内容は何だ？」

バーゼ「それがねく…………『鳥、風、雲、星…………全部が私、私が全部…………明日は南、明後日は北…………ぴくひやらこんこん、どんしやらら…………人生とは道だ…………そうだ、旅行行こう…………』」

ステイ子「ぷふふ…………何よそれ…………?」

マークII「だくっはっはっはっ!!マジ!?それマジで!」

バーゼ「うんマジ。あおのポエム、ナンバー85」

ステイ子「ぶっ、あはははははは!!ちよっ、あーははははははは!!あおのポエムっ!!ポエムっ!!しかもナンバー85つて…………そんなに書いてるの!」

マークII「ぶわははははは!!マジか、マジだったか!!ひく、ヤベ、腹イテく!!ゲホッゲホッ!!」

轟雷「85どころじゃないです…………」

バーゼ「一冊目の半分くらいの所で85だったよ」

ステイ子「あはははは!!ポエム書きすぎでしょっ!!」

そして轟雷とバーゼも耐えきれなくなったのか、ついに笑いだした。

轟雷「ぶっ…………」

バーゼ「ぷくくっ…………」

轟雷・ステイ子・バーゼ「「あはははははは!!」」

ウルフ「ふふっ、くくく…………!!」

マークII「だくっはっはっはっ!!」

それからしばらくして、やっと落ち着いた。

ステイ子「はあ…………今の私たちの話、あおが聞いたら大騒ぎね」
ウルフ「間違いないな。確信できる」

バーゼ「バーゼたち追い出されちゃうかもよ?」

マークII「まあそりやそうだろうな…………」

轟雷「あおにとつては秘密、なのでしようからね」

ステイ子「さて、と。たくさん笑わせてもらったし仕方ないから修理してあげるか」

するとつい先程までうんともすんとも言わなかったお掃除ロボが動き出した。

バーゼ「あつ、動いた!!」

轟雷「故障ではなかったみたいですね」

マークII「つつー事はこれで一件落着か?」

しかし次の瞬間、お掃除ロボから声が。

『鳥、風、雲、星……全部が私、私が全部……』

ステイ子はジト目でマークIIを見つめる。

ステイ子「……」

マークII「……ワリ、前言撤回。やっぱ一件落着じゃねえわ」

轟雷「それより今のは……?」

さらにお掃除ロボから声が。

『ポエムノート……サイン!?アイドル、恥ずかしい!!』

ウルフ「まさかヤツは……」

ステイ子「さっきの私たちの会話を録音してたって事!」

ウルフ「ああ、間違いない。あの掃除ロボからは確かにお前たちの声が出ている」

マークII「おいどうすんだよ?」

ウルフ「うゝむ……」

『ウケるゝ!!あおすりすり……にやゝつ!!あお、恥ずかしい!!ぷ

ぶぷ〜」

ステイ子「録音どころか私たちの声を勝手に組み替えてるじゃないっ!!」

ウルフ「非常にマズイな……………」

バーゼ「どうマズイの〜?」

ウルフ「この状態であおが帰ってきてみる……………」

バーゼ「あつ……………」

『マジであお、超ウケる〜!!人として恥ずかしい〜!!』

ステイ子「なんでギャル口調になつてんのよ!?!」

轟雷「すごい、ものすごいスピードで学習していますね!!」

ステイ子「感心してる場合じゃないっ!!」

マークII「そうだそうだ!!」

バーゼ「これホントになんとかしないとバーゼたち追い出されちゃうかもだね〜」

轟雷「追い出しはしらないと思いますが……………充電くんの刑にはなるかと……………」

ステイ子・バーゼ「「充電くんの刑?」」

マークII「なんだそりゃ?」

すると轟雷が赤面しながらこう言う。

轟雷「強制的に充電コードを抜き差しされるんです……………それはもう何度も何度も……………」

ウルフ「(そういえば前にそんな事があったな。私がライフルの手入れをしている時になにやら聞こえると思ったら轟雷の喘ぎ声のようだったという……………」

マークII「ブツ!!」

ウルフ「どうした?」

マークII「いやあやらしいなと」

ウルフ「……………そうだな」

ステイ子「なんだろう……………痛い訳じゃないけど……………なんかゾゾ

くっとする……」

するとお掃除ロボは今のステイ子の言葉を録音したようで、こんな事を再生する。

『マジであおのポエム、ゾゾくっとするくっ!!』

マークII「どんどんヒドくなるなオイ」

ステイ子「とにかくくっ!!とりあえずアイツを捕まえるわよ!!」

轟雷「了解っ!!」

バーゼ「はくい!!」

ウルフ「履帯展開、最大戦速!!」

マークII「ブーストオ!!」

5体はお掃除ロボ鎮圧のために行動を開始する。

轟雷は走り出し、ウルフは履帯を展開して走行する。

さらにステイ子とバーゼ、マークIIは空中を飛んで追いかける。

轟雷「くっ!!」

ウルフ「追いつけん……マークII、行けるか?」

マークII「誰に物言ってるんだ、行けない訳ねえだろ!!」

ステイ子とバーゼ、マークIIがお掃除ロボの上に取り付く。

マークII「よっしや取り付いたあ!!」

ステイ子「電源を!!」

しかしお掃除ロボの抵抗によりマークIIとステイ子は振り落とされる。

だがどうにかバーゼは取り付いたままである。

『ウケる〜!!』

マークII「どわったっ!!……クソッ!!」

ステイ子「バーゼ!!」

バーゼ「にやつはは〜!!ロデオだ〜っ!!」

マークII「オイめっちゃ暴れてんぞ!？」

轟雷「すごい……バーゼ……」

バーゼ「にやつはは〜!!んじやこのままっ!!」

そのままバーゼは乗ったまま洗濯カゴに突撃。
お掃除ロボは機能停止した。

バーゼ「いえ〜いつ、捕獲〜!!」

ステイ子「ふん、なかなかやるじゃない」

マークII「とか言つて〜、素直に認めるよ〜」

ステイ子「うっさい!!」

ステイ子はマークIIにハイキックする。

マークII「ありがとうございますっ!!」

ウルフ「……ネタでやっているんだな?」

マークII「あつたり前でござんしょ」

ウルフ「……そうか」

バーゼ「ステイレットつてさ〜、マークIIと仲良いよね〜」

ステイ子「な、何よバーゼ……そんなニヤニヤして……」

バーゼ「ねえねえステイレット〜、もしかして……マークII
好き?」

バーゼは小悪魔な笑みを浮かべながらニヤニヤしつつステイ子に

聞く。

ステイ子「え”っ!?”

バーゼ「ねえねえ、どうなの〜?」

ステイ子「し、知らないわよ!!」

バーゼ「へ〜」

ステイ子「な、何なのよ……」

すると遊びに行っていたあおが帰ってくる。

あお「ただいま〜ってえええええ!?!何これええええ!?!」

轟雷「あ、おかえりなさい。あお」

あお「いったい何をしたの!?!掃除は!?!っていかお掃除ロボは!?!」

轟雷「あの、あお……お掃除ロボは……えつと……」

バーゼ「故障じゃなかったんだけどね〜、バーゼ壊しちゃった〜」

あお「ええ〜……?」

バーゼ「だからバーゼが、轟雷とウルフでバトルするね!!」

ウルフ「何故俺も!?!」

ステイ子「アンタ指示しかしてないでしょ」

ウルフ「ああ、なるほど」

ステイ子「(納得しちゃった……)」

轟雷「……ああ、バイト代を稼ぐという事ですね?」

バーゼ「うんっ!!」

ステイ子「そして、そのお金でお掃除ロボを修理してもらって訳ね」

バーゼ「そうっ!!」

あお「仕方ないなあ……」

そして少々準備を進める。

少しして準備が完了した。

ウルフ「装甲パーツ選択完了。これ（榴雷改）で行く」
轟雷「わかりました。では……………」

セッションベースが光り出す。

轟雷「轟雷!!」

バーゼ「バーゼラルド!!」

ウルフ「ウルフ!!」

轟雷・バーゼ「フレームアームズガール、セッション!!」

ウルフ「フレームアームズ、セッション!!」

轟雷「GO!!」

バーゼ「にやははっ!!」

ウルフ「発進!!」

そしてそれぞれ装甲パーツを装着する。

バーゼ「わっくわく、ぱぱくん!!」

轟雷「ハートの微熱、届けますよ!!」

ウルフ「アーマー装着……………榴雷改、発進準備完了!!」

今回のフィールドはどうやら湖のようだった。

バーゼ「轟雷く、ウルフく!!言っとくけどバーゼ強いよ!!」

轟雷「負けません!!」

ウルフ「同感だ」

バーゼ「行つくよ!!」

ウルフ「旋回飛行を始めた……………」

ああ「あれ、このパターンって……………」

ステイ子「そうね。バーゼは私と同じで空中戦を得意とするから

……」

マークII「轟雷にとつちやあ厄介、つつー事か」

ステイ子「ええ」

マークII「だが、それだけのハンデがあった方が面白い。それに、轟雷とウルフを甘く見ない方がいいぜ？」

ステイ子「どういう事よ？」

マークII「まあ見てろって」

バーゼは各部の武装を展開、攻撃態勢に移行する。

バーゼ「オールウエポンシステム起動、フルバーストモードツ!!」
ウルフ「轟雷、狙われているぞ!!」

轟雷「はいっ!!」

ステイ子「あっ、バーゼったら一発で決める気じゃないっ!!」

バーゼ「にやつははっ!!」

レーザーが轟雷とウルフに向かって飛んでいく。

轟雷「きやあっ!!」

ウルフ「チツ……」

あお「轟雷!!」

しかし、あたらない。

バーゼが何度撃ってもあたらない。

バーゼ「あれっ?なんかもくもくしてあたらない……」

ウルフ「……まさか」

轟雷「チャフ!?!」

ステイ子「そっか!!さっきお掃除ロボが吐き出した埃がチャフの代わりになってるのよ!!」

マークII「ほほ、やっぱりか」
ステイ子「アンタわかってたの？」

マークII「まあな。ちよいと煙たかったんでね」

あお「うわ、バーゼと同じでマークIIも頭いいでしょ」

マークII「いやあそんなまさか」

あお「でも、そのチャフって轟雷とウルフの攻撃に影響する？」

ステイ子「しないわ。だって轟雷とウルフの攻撃は実弾だから」

あおがこれを好機と見たのか、轟雷に指示する。

あお「よし、轟雷!! 一気に撃っちゃえ!!」

轟雷「了解!!」

ウルフ「六七式・長射程電磁誘導型実体弾射出器、発射アツ!!」

バーゼ「ちよちよつ、待って!?!にやああああああ!!」

轟雷の放った滑空砲にウルフの放った六七式・長射程電磁誘導型実体弾射出器の弾が直撃、バーゼのライフを全て削り取った。

『Winner 轟雷、榴雷改』

バーゼ「あくあ負けちゃった……でも楽しかった!! またやろうね轟雷!!」

轟雷「はいっ!!」

あお「よし、これでバイト代ゲット!! さらにお掃除ロボの修理もできる!!」

それから数分後。

あおが戻ってくると今度は掃除機を抱えていた。

あお「たっだいま!!」

轟雷「ああ、それは？」

ウルフ「掃除機、か」

ああ「いやあく、なんかわかんないんだけどさ？下で管理人さんに会ってお掃除ロボ修理中だろって話したらこれをそつとね？」

轟雷「掃除機ですよね？」

バーゼ「なんかすごく武器っぽくい!!」

ステイ子「ちよつとテンション上がるわね」

マークII「見た感じライフルっぽいしな」

轟雷「良かったですね、ああ」

『お掃除しよう!!』END

『ゼルファイカール、源内家に立つ』

ある日のあおの部屋にて。

あお「……また、兄さんから送られてきた」

轟雷「ウルフたちのような新しいFAでしょうか？」

あお「まあいいや、開けてみようか」

轟雷「そうですね。開けてみましょう」

黒い箱を開けると、中にはヒロイックな機体が入っていた。
数秒後、ヒロイックな機体の目が光り、起動したようだ。

ゼルファイカール「ゼルファイカール、起動。アクチュエーター問題無

し。どうやら目的地に着いたみたいだな」

轟雷「あの、貴方の名前はゼルファイカールというのですか？」

ゼルファイカール「ああ。ただ名前が長いから……ゼロ、とても呼んでくれ」

轟雷「わかりました、ゼロ」

あお「あれ？ねえ轟雷、ゼロの頭よく見て」

轟雷「どうしました？」

あお「ほら、なんとなく頭の感じがバーゼに似てない？」

轟雷「あ、確かに」

ゼロ「ああ、俺は元々バーゼラルドをベースに改造された機体だ。スピードはバーゼラルド以上になっている」

あお「うはく……よし、おーいバーゼ」

バーゼ「何？どうかしたのあお？」

あお「ほら、新しいFA」

バーゼ「おー!!私バーゼ!!よろしくね!!」

ゼロ「ゼルファイカールだ。ゼロと呼んでくれ」

ウルフ「む、ようやく合流か。ゼルファイカール」

ゼロ「ああ。それよりあのヴァカ^{マークII}は迷惑かけてないか？」

ウルフ「ああ、問題無い」

ゼロ「それならいいんだが……」

ちらとゼロが目線を変えると……。

マークII「リーリー、リーリー!!ほらどうした当てるんだろ？

もつとかかってこいよステイ子ちゃん!!」

ステイ子「こんのお……腹立つう!!」

ステイ子が太刀を持ってマークIIに斬りかかろうとしていたがことごとく避けられる図があった。

ゼロ「……………」

マークイー「ん？おー、ゼルファイカールじゃねえか。久しぶたわばっ!?!」

マークイーが気がついた頃にはゼロがドロップキックしていた。

マークイー「ぐおおおおお腰がああああ……!!」

ゼロ「他人に迷惑かけるなど何度も言ってるだろうが!!」

ああ「うわゝ、いいブレーキじゃん」

ゼロ「良くない!!」

するとステイ子がゼロの肩に手を置く。

ステイ子「……………アンタも、苦労人なのね」

ゼロ「……………そうみたいだ」

『ゼルファイカール、源内家に立つ』END

『マテリア姉妹とダオ兄弟がやってきた』

『マテリア姉妹&ダオ兄弟がやってきた』

……システム起動

各部アクチュエーター問題無し

スラスタ―出力問題無し

各部武装欠損等無し

視界良好

オールグリーン

ウエアウルフ アクティブ

ウルフ「……もうこんな時間か」

轟雷「あ、やっと起きたんですね。ウルフ」

ウルフ「ああ」

轟雷「もうすぐあおが帰ってきますよ」

ウルフ「了解した。すぐに行こう」

他愛のない話をしているとあおが帰ってきた。
だがなにやら様子がおかしい。

あお「ただいま……」

轟雷「おかえりなさい、あお……ってええ!？」

ウルフ「おい、上半身が濡れているぞ」

ステイ子「ちよつと、アンタどうしちゃったのよ!？」

バーゼ「うえ……あおきちやない……」

マークII「ひでえやられ様だな」

ゼロ「いったい何があったんだよ……」

ああ「いやあ……帰り道ヤギと遊んでたら色々であって……」
轟雷「激しい遊びなんですね」

バーゼ「でもなんで濡れてるの？」

マークイー「あ、それ俺も気になる」

ああ「聞かないで、色々あったのっ!!とにかくシャワー浴びてくる!!……あ、そういえばまた何か荷物来てたよ。開けてていいからね」

そう言つてああはシャワーを浴びに行つた。
その間に2つの荷物を部屋に運び込む。

轟雷「新しいFAガールでしょうか？」

ステイ子「多分ね。それで、もう片方が新しいFAつてとこね」

ウルフ「大方間違いないだろう」

バーゼ「じゃ、早速開けてみよっ!!」

ああが風呂で満喫している途中で、早速荷物を開ける。

2つの荷物の中には、一つは2体のフレームアームズガールが寝ており、それぞれ色が違っている。

もう一つは2体のフレームアームズが入っていた。

形状は多少違えど恐らく同型機であろう。

轟雷「これは……」

するとFAガールが先に目を覚ましたようだった。

クロ「着いたの……?」

ウルフ「よく似ている個体だな」

そして箱から出てくる。
なんとなく似ていると感じた。

シロ「あら……あなたが」

クロ「轟雷ちゃんね」

轟雷「あ、はいそうで……っ!？」

2体のFAガールが轟雷に近寄り、頬に口づけをする。

シロ「それから、ステイレットちゃん」

ステイ子「ひゃああっ!？」

クロ「バーゼラルドちゃんにも」

バーゼ「にへへ」

シロ「あら？あなたたちは？」

クロ「私たちとは違う機体？」

ウルフ「ウエアウルフという。ウルフと呼んでくれ」

マークII「俺はスーパースティ……じゃなかった、マークIIだ。よろしくな」

ゼロ「ゼルファイカールだ。ゼロって呼んでくれ」

シロ「じゃあ……」

クロ「ウルフ君に、チュツ」

ウルフ「……？」

シロ「マークII君にも、チュツ」

マークII「いやあ照れるなあっ!!」

ゼロ「浮かれるなよマークII」

マークII「わかってるって」

クロ「それからゼロ君にも、チュツ」

ゼロ「うわっ!？」

そして、2体のFAガールは同時に挨拶をした。

シロ・クロ「「」きげんよう」

2体のFAガールが挨拶した数秒後、2体のFAも動き出した。

ジイダオ「……………」

レイダオ「……………」

バーゼ「わっ、いつの間にか起動してる〜!!」

ジイダオ「俺はジイダオ」

レイダオ「僕はレイダオ」

ジイダオ・レイダオ「「これからよろしくな（ね）」

軽くジイダオとレイダオが自己紹介した後、シャワーから上がった
あおが戻ってくる。

あお「お、新顔だね〜。なんか似てるけど姉妹？兄弟？名前はなん
て言うの？」

ジイダオ「ジイダオだ」

レイダオ「レイダオだよ」

シロ・クロ「マテリアですわ（よ）」

あお「うえ？えっと、君がジイダオ」

ジイダオ「ああ」

あお「君がレイダオ」

レイダオ「うん」

あお「それで……………あなたがマテリアで、あなたもマテリア？」

ウルフ「同じネームか」

シロ「そうよ。私たちは全てのボディの元となった基礎なの。二人
一緒に設計され……………二人一緒に造られたの。だから名前も一つ

ステイ子「なんだかややこしいわね」

バーゼ「へんなの〜」

シロ「あら……今まで何の問題もなかったわ」

クロ「だからあなたたちもマテリアと呼んで構わなくてよ」

轟雷「そう言われても……」

するとあおが何かを思いついたようで、シロから指を差してこう言う。
う。

あお「んく……シロ、クロ。めんどくさいからそう呼ぶ、いい?」

マークII「いやそれは安直すぎねえか?」

シロ「まあ……私がシロ」

クロ「私がクロ」

シロ「うふふ……なんだか照れくさいですわね」

クロ「でも、悪くない感じ」

マークII「気に入っちゃまったよオイ」

ゼロ「突っ込むのは無しだ、いいな?」

マークII「……だな」

バーゼ「なんかいい人っぽいね!!」

轟雷「そうですか?よくわかりませんが……」

ステイ子「ホント、よくわかんない……じゃなくて、バトルよバ

トル!!あんたたちバトルしに来たんでしょ!」

シロ「あら、忘れていましたわ」

クロ「いけない、つい……」

ウルフ「……嫌な予感がする」

マークII「嫌な予感ってのは?」

ウルフ「……あの二人から目を離すな」

ゼロ「わかった」

あお「おー、やっぱりバトルするの?」

すると彼女たち姉妹は口角を上げ、嬉々としてこう言う。

シロ「ええ、もちろん」

クロ「あなたたちのようなまっさらで……」

シロ「ぴかぴかで……」

シロ・クロ「可愛らしい子たち」

シロ「本当に……」

クロ「とつても……」

シロ・クロ「壊しがあるなあく!!」

ウルフ「(あれが彼女らの本性か……危険だ)」

シロ「上手に上手に壊してあげる……きつとつても気持ちいいわよ?」

クロ「痛みは至福でしょう?いい声でお泣きなさいな」

シロ・クロ「ウフフフフ……」

ゼロ「うわ……えげつない性格だな……」

ウルフ「轟雷、無理に戦う必要はない。退け」

轟雷「……いえ、私はやります。よりよいデータを得るために」
バーゼ「そうこなくっちゃ!!」

セッションベースを接続後、ステイ子は不満そうな表情をしている。

ステイ子「うええ……なんで私なのよ……」

シロ「うふふ、バーゼちゃんからはなんとなく私たちと同じ匂いがあるんだもの」

クロ「どうせ壊すならステイレットちゃんみたいな強気で脆い子が楽しいわ」

ジイダオ「……」

レイダオ「……兄さん?」

ジイダオ「……大丈夫だ、なんでもない」

ステイ子「あーもういいわよ!!」

轟雷「さあ、装甲パーツをセットしてください」

シロ「いいえ、私たちはこのままで」

クロ「どうせあたらなもの」

シロ「武器さえあれば」
クロ「十分だわ」

そう言っつて、セツションベースに二つのおぞましい武装がセツトされる。

マークII「うーわ、ずいぶんエグい武装持ってきてんな」

轟雷「ステイレット、あの武装を知っていますか？」

ステイ子「ううん、見たことない」

バーゼ「ほえく、グラインドサークルとビーストマスターソードだあ!!扱いがすごく難しいって聞いてたけどマテリアすごい!!」

ああ「ふうんそうなんだあ」

ゼロ「ああ、お前興味無いだろ」

ああ「え?何が?」

ゼロ「やっぱなんでもない」

ああ「?」

轟雷「あの武装には挙動データがありません。迂闊に飛び込むのは危険ですね」

ステイ子「そんな事言ったらデータが集まらないわよ!!アンタは私の援護を!!」

直後、セツションベースが光り出す。

轟雷「轟雷!!」

ステイ子「ステイレット!!」

シロ・クロ「マテリア」

轟雷・ステイ子・シロ・クロ「フレームアームズガール、セツション!!」

轟雷「GO!!」

ステイ子「見てなさい!!」

シロ・クロ「行きますわよ」

一瞬で転送され、轟雷とステイ子は装甲を装着する。

ステイ子「本気の私、誕生!!」

シロ・クロ「秘密の花園、覗きにおいてなさい?」

ウルフ「ふむ、今回のステージは洋館か」

マークII「遮蔽物が少なえな……文字通りガチンコ勝負って事か」

ステイ子「私がシロをやるから、アンタはクロを!!」

轟雷「ステイレット!?!」

シロ・クロ「さあいらっしやい。可愛がってあげる」

ステイ子は突撃するが、シロの扱うビーストマスターソードの連撃により、ダメージを負い突進力を殺される。

シロ「うふふ……」

ステイ子「なっ!!」

シロの扱うビーストマスターソードの連撃により、ダメージを負う。

ステイ子「キヤアアアア!!」

轟雷はクロの扱うグラインドサークルに苦戦している。

思ったように弾があたらず、さらには射線上にステイ子が重なるために、さらに苦戦を強いられている。

ステイ子「バカッ、アンタはクロの足止めしてなさいよ!!」

轟雷「ステイレットが射線上にいるからです!!」

二人が油断した隙にシロがビーストマスターソードによる攻撃を

ステイ子に、クロが轟雷にマウントポジションを取る。

シロ「あらあらまあまあ、ステイレットちゃんったら背中ががら空き〜!!」

ステイ子「あうっ!!」

クロ「轟雷ちゃんは脚がいいわね……端から少しずつ刻みたくなる。いい悲鳴を聞かせてちょうだい?」

轟雷「くっ!!」

ステイ子「何なのよこれ、全然攻撃があたらないじゃない!!」

轟雷「ステイレット、このまま各個撃破は無理です!!こちらもチムバトルをしないと!!」

ステイ子「アンタが私の足を引っ張らなきゃいいのよ!!」

シロ「あらあら仲間割れ?」

クロ「悲しいわ」

その戦闘の様子を見ていたあおが焦りだす。

あお「ああもう見てらんない!!なんか手はないの!」

バーゼ「あの二人がもつと仲良ければいいんだけどね〜」

あお「そんなの急には無理だよ……つてあれ?ジイダオとレイダオは?」

バーゼ「あれ〜?……あつ、あお!!」

あお「何?」

バーゼ「セッションベースの上に二人が乗ってる!!」

あお「どうするつもりなの二人とも?」

ジイダオ「決まってる」

レイダオ「あの二人にちよつとお灸を、ね」

ジイダオ「行くぞレイダオ」

レイダオ「わかったよ兄さん」

ジイダオ「ジイダオ」

レイダオ「レイダオ」

ジイダオ・レイダオ「フレームアームズ、セッション!!」
ジイダオ「ready」
レイダオ「go!!」

同時に転送され、轟雷とステイ子の元に。

轟雷「(このままでは……!!)」

ステイ子「こんのお……!!」

シロ「これで」

クロ「おしまいよ」

二人の目前にビーストマスターソードとグラインドサークルが迫る。

直撃するかと思われたが、それを乱入してきたジイダオのシールドによりはじかれた。

ステイ子「……え？」

轟雷「お二人共、どうして？」

ジイダオ「……別に、あいつらの戦い方が気に食わなかったただだ」

レイダオ「兄さんは素直じゃないなあ。大丈夫？」

ステイ子「別にアンタたちの助けなんて!!」

レイダオ「じゃあ、あのまま壊されたかった？」

ステイ子「……っ」

レイダオ「そういう事。少し休んで。その間に僕らがなんとか削るから」

シロ「あらあらまあまあ、また壊しがいのある子が……」

クロ「どうせあたらないわ、あなたたちの攻撃も」

ジイダオ「御託はいい、そして宣言する」

シロ「何かしら？」

ジイダオ「俺はお前たちに銃弾を三十発、斬撃を四回、蹴りを二回する。避けられるなら避けてみる」

クロ「余裕ね、あなた」

ジイダオ「レイダオ、カバー頼む」

レイダオ「任せて、兄さん」

シロ「ほらあ、隙だらけっ!!」

ジイダオ「甘いな、お前の背中ががら空きだ」

ジイダオのライフルによる三点バーストがシロの背中に直撃する。

シロ「!?!」

ジイダオ「レイダオ、スイッチ」

レイダオ「わかったよ、兄さん」

ジイダオとレイダオの場所が入れ替わり、レイダオの巨大な腕から発射されるビームまでもが直撃、さらに入れ替わった勢いでジイダオのライフルによる三点バーストを三回、クロに直撃させる。

轟雷「い、今の見ましたかステイレット!?!」

ステイ子「凄い、綺麗なコンビプレーよ……」

シロ「今のは……」

クロ「あなたたちが?」

ジイダオ「そうだ」

レイダオ「兄さん、そろそろ」

ジイダオ「わかった、頼むぞレイダオ」

そう言った瞬間、レイダオがジイダオを腕に乗せ、一気に上空にうち上がる。

上空に打ち上げられたジイダオはライフルを構え、シロとクロに照準を合わせる。

そして、一気に斉射する。

ジイダオ「よし、予定通り三十発hit確認。レイダオ、実体剣を」
レイダオ「了解!!」

巨大な腕を器用に使い、実体剣を掴んだレイダオはジイダオに向けて投げる。

ジイダオ「キャッチ……そこだ」

一気にブーストし、シロとクロの懐に飛び込みつつ、宣言通り四回の斬撃をくらわせ、蹴り飛ばす。

シロ「くっ……」

クロ「やるじゃない……」

ジイダオ「レイダオ、フルバーストだ」

レイダオ「エネルギー充填は既に済ませたよ。後はいいんだよね？」

ジイダオ「ああ、やれ」

レイダオ「わかった」

レイダオの腕部バスターキャノン（フルチャージ）が唸り、二人を吹き飛ばす。

ジイダオ「……まだやれるのか」

レイダオ「あたる直前に身体をよじって受け身を取ったのか……
凄いや」

シロ「でも、まだ負けてないわ」

ジイダオの目前にビーストマスターソードが迫るが、轟雷が割り込み、ナイフで防ぐ。

轟雷「ようやく戦い方のコツがわかりました。後は私たちにやらせてください、ジイダオ、レイダオ」

ジイダオ「……」

レイダオ「好きにやってみなよ、轟雷ちゃん」

轟雷「はい!!」

その様子を見ていたあおたちはこう言う。

あお「凄い……さすが双子ってだけはあるねえ」

バーゼ「でもでも、轟雷たちには決定打になるような武装はないよ?」

あお「だいつじよぶ!!こういう時のために……あつたあつた。じゃーん、武希子お手製の武装を作ってもらったんだよ!!えーと何々……」

添付されていた説明書を読み始める。

武希子からの手紙のような物だった。

武希子《やつふーあお、出来たよ出来たよ、FAガールの新武器!! その名もヘビーウエポニュニット17、『リボルビングバスターキャノンプロトタイプ』!!いや、素晴らしいパーツ構成でランナー注入口すら芸術品、塗装もバッチリとしたぞぞぞ!!ポイントはプロ立ち上げによる重量感!!そして鉄板のジャーマングレー!!あ、ジャーマングレーホント良い色、結婚したいっ!!寿ジャーマングレー武希子になりたいなり……でもってブッキーくくりのラストイーブラウンとストレージンググレーを5対1で混ぜてオイル汚れをリアルさっ》

長すぎて読む気が失せたのか、あおは説明書をそっ閉じする。

ウルフ「よほどのマニアのようだな」

あお「とにかくこれで!! ってどうすればいいの?」

バーゼ「うんとね、轟雷のセッションベースに置いて、スマホでピツ
て」

直後リボルビングバスターキャノンが転送され、轟雷の上へ。

あお「轟雷、これ使って!!」

轟雷「了解です!!」

落ちてきたリボルビングバスターキャノンをキャッチした轟雷は
見た瞬間目が輝く。

轟雷「これは……凄い仕上がり……あおが適当に組んだズサン
なゲート処理の武装とは比べ物になりません!! これならあたれば絶
対勝てます!!」

ステイ子「あんな動きのわからないヤツにどうやってあてんのよ
!?!」

轟雷「え、それは……なんとかします、なんとかか!!」

ステイ子は轟雷の何かを感じたのか、轟雷にこう言う。

ステイ子「……いいわよ、私が囿になる」

轟雷「え、そんなの無茶です!! もし失敗したらステイレットは
……!!」

ステイ子「一人だけだと出来ない事は、皆一緒に協力すれば出来る
んでしょ?」

轟雷「ステイレット……」

ステイ子「その代わり、ちゃんとあてなさいよ」

轟雷「……………はいっ!!」

するとステイ子はマテリア姉妹に向かって飛んでいく。

轟雷「エネルギーチャージ開始!!」

ステイ子「ほら、こつちよ!!」

シロ「あらあらまあ」

クロ「逃がしはしないわよ?」

徐々にエネルギーがチャージされていく。

だがそれと同時進行でステイ子にもダメージが蓄積されていく。

ステイ子「まだなの!?!」

轟雷「もう少しです!!チャンスは一度だけ、マテリア姉妹を確実に倒すためにはエネルギーチャージ率を100%にしないと……………!!」

ジイダオ「……………ほら」

轟雷「ジイダオさん、そのケーブルは……………?」

ジイダオ「俺とレイダオのエネルギーも分けてやる。早くしないとアイツが壊されるぞ」

轟雷「ありがとうございます!!」

しかし、ステイ子がクロの扱うグラインドサークルに下敷きにされてしまう。

ステイ子「あっ……………ぐう……………!!」

シロ「ステイレットちゃんみたいな子の心を折って這いつくばらせるのって最高く!!」

クロ「やっぱり涙と鼻水でグチャグチャな顔が一番可愛いわよね」

シロ「ほら泣いて?」

クロ「叫んで?」

シロ・クロ「もつともつと壊れて?」

ステイ子「いい加減にしてよ、この変態っ!!」

甲高い警告音が聞こえる。

すなわち、リボルビングバスターキャノンのチャージ完了の合図。

轟雷「チャージ完了、ステイレット避けて!!」

ステイ子「わかったわ!!」

轟雷の掛け声でステイ子は射線上から退避した。

轟雷「リボルビングバスターキャノン、最大出力っ!!発射あ!!」

ウルフのごとく叫びながら発射する。

轟雷型はよく似ている事が読み取れる。

シロ「えっ?」

クロ「うそ?」

直後、二人は爆発に巻き込まれる。

シロ・クロ「キャアアアア!?」

残りわずかだったHPゲージが今、零になった。

『Winner 轟雷、ステイレット』

轟雷「…………ふう」

ステイ子「はあく……………」

ジイダオ「……………」

轟雷「ジイダオさん？その手は？」

そつとジイダオが轟雷に、レイダオが巨大な腕をステイ子に差しのべていた。

ジイダオ「…………よくやった」

レイダオ「二人のコンビネーション、僕らに負けず劣らずだったよ」

轟雷「あ、ありがとうございます。ジイダオ、レイダオ」

ステイ子「轟雷…………アンタチャージ遅すぎるのよ、バカ」

轟雷「えへへ、すみません」

ステイ子「ふふっ」

ジイダオ「今回得た気持ち、無駄にするなよ」

レイダオ「それはきつと、君らにとって大事な事だから」

轟雷「はいっ!!」

ああ「なんか仲良くなってる？」

バーゼ「怪我の功名ですなあ〜」

マークII「だな。何にせよ結果オーライだ」

それから数分後。

ああ「ええええええええ!?帰らない!?!」

シロ「ええ。負けっぱなしじゃ悔しいし」

クロ「私たちもデータを集めなければならないの。そのためにはここに
いるのが一番じゃない？」

シロ・クロ「それに」

ウルフ「それに……何だ？」

シロ・クロ「私たち、気に入った子がいるから」

ステイ子「……ねえ、少なからず寒気がするのって私だけ？」

ジイダオ「……奇遇だな、俺も同じ寒気を感じる」

シロ「ねえ、ステイレットちゃん？」

クロ「それに、ジイダオ兄様？」

ジイダオ「……俺はお前たちの兄じゃない」

シロ「もつとステイレットちゃんの悲鳴が聞きたいな」

クロ「ジイダオ兄様には軽く罵ってほしいかも」

ジイダオ・ステイ子「帰れお前ら（アンタたち）!!」

ステイ子「冗談じゃないわよ、あお!!こんなヤツら追い出して!!」

あお「うーん……これ以上増えるのもね……」

シロ「あら残念。私たちがいればバトルも増えて」

クロ「それだけ追加報酬がもらえるのにな」

マテリア姉妹のこの一言が、地雷となった。

あお「いやあ新しい家族が増えるっていいもんだねえ」

ステイ子「ええええええ!!」

マークイー「金の誘惑にあっさり負けやがったあ!」

シロ「大丈夫よステイレットちゃん、すぐ慣れるわ。痛いのは最初だけ」

クロ「そう、一度覚えてしまえば私たち無しでは生きていられない体になるわよ？」

ステイ子「うう……胃がある訳なのに痛むんだけど……」

ジイダオ「……気を強く持て」

バーゼ「ステイレットめ、憂いやツよの。ほれほれ轟雷、お前も加わらんか？」

轟雷「えつ、と……諦めてください、ステイレット」

ステイ子「何それ!!私帰る、ファクトリーアドバンスに帰るく!!」
あお「いやあ潤いますなあ〜」

ウルフ「……………どうにもならんな」

ゼロ「ああ、違うない」

クロ「さあ、ジイダオ兄様?私たちと遊びましょ?」

ジイダオ「……………断るっ!!」

ステイ子はさらに腹痛が、あおはさらに懐が温まるのであった。

クロ「いつそのこと思い切り罵ってくれても……………」

ジイダオ「嫌だっ!!」

『迅雷、バルチャー参上!!』

はるか上空、鳥型のロボットに乗せてもらい移動しているFAガールが一体。

彼女が今回のキーパーソンである『迅雷』である。

さらに、迅雷を乗せている機体も、キーパーソンの『バルチャー』である。

バルチャー「なるほど……つまり轟雷とやらと戦って、データを
得るために来た」と

迅雷「そういう事だ。協力感謝するぞ鳥」

バルチャー「あのなあ……俺にもちやんと名前あんの。知ってる
？」

迅雷「む、それはすまない」

バルチャー「……まあいい、俺はバルチャー。よろしくな」

迅雷「ああ、よろしく頼む。バルチャー」

バルチャー「んじや、飛ばすぜ。しつかり掴まってな」

迅雷「承知!!」

場所は変わり源内 あおの自宅。

どうやらあおは夏休みをどう過ごすか計画を立てていたようだ。
ステイ子もあおの読んでいる雑誌に興味があるようで、一緒に見て
いる。

しかしバーゼはあおの邪魔がしたいのか、あおの頬をツンツンつっ
いている。

そんなやり取りに目も向けずマテリア姉妹は柔軟体操、というより

ダオ兄弟に手伝ってもらっている。

そんな様子を見ながら轟雷は滑空砲を、ウルフはナイフの手入れをしている。

マークイーはゼロをからかいしばかれ、ジイダオはマテリア姉妹の奇行に頭を抱えている。

ああ「ねえ、やっぱり私この水着に決めた!!どう思う?」

轟雷「……………」

ああ「ねえってば轟雷、どう思う?」

轟雷「どう、とは?」

ああ「いやだから、夏休みにみんなで海に行く計画を立てて……………」

しかしその瞬間、部屋のカーテンが引き裂かれる。

ウルフ「……………ツ!!敵襲、敵襲ーツ!!」

マークイー「マジかつ!!ゼロ、エネルギーはあるか?」

ゼロ「大丈夫だ。いつでも迎え撃てる」

ジイダオ「レイダオ、援護を」

レイダオ「わかったよ、兄さん」

そして、引き裂かれたカーテンから一体のFAガールが現れる。

ああ「何何何!?何なの!?!」

迅雷「迅雷さんじよっ……………」

しかし。

ウルフ「ムーブ!!」

マークII「捕まえろお!!」

ゼロ「確保オーツ!!」

迅雷「なっ、ちよっ、待っ!?!」

瞬く間にFA達に確保される。

ジイダオ「確保成功。そこから動くな」

レイダオ「ついでに武装解除するんだ」

迅雷「む、無念……!!」

あえなく武装解除するFAガール。

しかし、さらに窓から新たな機体が現れる。

バルチャー「迅雷、掴まりな!!」

迅雷「むっ、かたじけない!!」

武装解除したのは束の間、FAガールは謎の機体に掴まり、あおのよく使う机の上に着地。

FAガールを降ろすと同時に、謎の機体は可変して人型に変わった。

あお「へ、変形した……!?!」

ウルフ「な、お前は!!」

バルチャー「ふうううう……よお、久しぶりだな?」

片手を振って会釈するFA。

その横で、腕を組んで仁王立ちしているFAガールがこう言う。

迅雷「えー……コホン、迅雷、参上!!」

バルチャー「ついでにバルチャー参上ってな」

ああ「ちよ、ちよっと待って!?迅雷だっけ、落ち着いて……」

迅雷「うるさい、私はデータ収集をするためにここに来たのだ!!轟雷は何処だ!？」

迅雷がキョロキョロと見回す。

が、バルチャーの手刀が迅雷の頭部に炸裂する。

迅雷「アイエエエエエ……」

バルチャー「馬鹿野郎、お前忍の何たるかを忘れたのか?」

迅雷「そ、それは……申し訳ない、”師匠”」

バルチャー「師匠?」

迅雷「そう、師匠は私に優しくしてくれただけではなく、移動中暇な時に私にちよっとした技術を教えてくれたではないか」

バルチャー「あれは……」

ウルフ「まだまだ未熟に見えたから」

轟雷「ですよね」

ウルフと轟雷がバルチャーの心中を言い放つと、迅雷が振り向く。

迅雷「おお、お前が轟雷……まさか本当に起動しているとは

……」

轟雷「はじめまして迅雷、私が轟雷です」

轟雷がにこやかに挨拶をする反面、迅雷は苦無（クナイ）を構える。しかしそれをあおが仲裁に入る。

あお「ちよつと待つてタイムタイム!!迅雷の目的はよくわかった、でもさ、なんで窓から入ってきたの!?!カーテンびりびりじゃん!!」

迅雷「敵の隙を突く!!」

マークII「は?」

迅雷「これは奇襲だ、すでに戦は始まつて」

バルチャー「どっこいしょー」

迅雷が言い終える前にバルチャーの手刀がまた、炸裂する。

迅雷「ア、アイエエエエエ……!!?」

バルチャー「あのな、今戦国時代じゃねえの。わかるかノウタリン」

迅雷「す、すみません師匠……!!」

バルチャー「わかればいい。んで、お前さんが源内あお?」

あお「あ、うんはじめまして」

迅雷「ただ者ではないのだろうか?轟雷の使い手とは……!!」

すると迅雷の身体が震えだす。

マークII「なんだあ?寒いのか?」

迅雷「違う、武者震いが止まらないのだ……!!」

ゼロ「武者震い、ねえ」

あお「ねえねえ、その目につけてるのは何?」

ウルフ「眼帯、だな」

迅雷「よくぞ聞いてくれた、これを装着すると聞こえるのだ……

古の大地を騎馬鉄砲隊の馬の駆け抜けていく足音が……!!」

マークII「……あらやだ、てっきり厨二病こじらせてんのかと」

ゼロ「余計な事言うな馬鹿」

ゼルファイカールの蹴りがマークIIに炸裂し、吹っ飛ぶ。

あお「騎馬鉄砲隊……?」

迅雷「お主伊達政宗公を知らぬのか!?英雄だぞ!!」

あお「あ、なるほどく、まねっこしてるんだく!!」

迅雷「真似とは人間きの悪い!!政宗公への憧れと尊敬、そして装着する事への胸の高鳴り……!!」

ウルフ「要は好き、という奴だな」

あお「あー、おしやれ感覚つてやつ?」

迅雷「そ、そんな事はどうでもいい!!早く、バトルを!!」

迅雷がバトルを申請する、が……。

あお「あ、あのね?バトルは後でもいいかな?今夏休みの計画を立てているから忙しいんだよく。ね、轟雷?」

轟雷「そのようです、迅雷」

マークII「いや、そこは受けてやる流れだったろ!」

あお「だつてえく……」

ふとバーゼが現れ、こんな事を言い出す。

バーゼ「そうだ、迅雷も夏休みに一緒に海行こー？」

迅雷「ぬっ、お主は何者だ!？」

バーゼ「バーゼだよ!!みんなと一緒に夏休みに海に行くんだ!!」

ステイ子「私はステイレット」

シロ・クロ「マテリアよ」

彼女らが自己紹介する。

しかし迅雷はわなわなと身体を震わせ、怒りを露にする。

迅雷「お主……夏休みだと……!?!お主は轟雷を起動できた人間、選ばれた者だと自覚はないのか!？」

ああ「選ばれた者って大げさだなあ……たまたまだよたまたま」

迅雷「ならば……夏休みとデータ収集のためのバトル、どちらが大切なのだ!!」

ああ「そんなの……」

数秒後、ああは息を荒げて言い放つ。

普通ならバトルが大事だ、という流れなのだろうが、彼女は違った。

ああ「……夏休みに決まってるじゃん!!楽しい夏休みのためのバ

トルでしょ!?!」

迅雷「ならばこちらから攻撃を仕掛けるのみ!!」

迅雷の武装、手裏剣をあおに向けて投げる。

だが、バルチャーがこれを防ぐ……が、撃ち漏らしが1つ、あおに直撃する。

あお「あいたつ!?! どうして私を攻撃するの!?!」

迅雷「無論……!!」

迅雷がさらに追撃を仕掛けようとした時、あおの腕の上に轟雷が立つ。

轟雷「やめてください迅雷!!」

迅雷「なんだ、轟雷?」

轟雷「あおに攻撃する事は私が許しませんっ!!」

あお「轟雷……」

轟雷「バトルセッションを始めます!! 私と迅雷、一対一で!!」

迅雷「ほう、望む所だ!!」

バルチャー「まあ待て迅雷、その楽しそうな遊び……俺も混ぜてくれよ」

迅雷「師匠……わかった。おい黒いの」

迅雷がウルフに指を差す。

迅雷「師匠がお前との決闘を望んでいる。お前も戦え」

ウルフ「………了解した。バルチャー、バトルを始めよう」
バルチャー「いいねえ、楽しそうだ」

数分後、準備を終える。

轟雷「慣れてきましたね、あお」

マークII「だな。だいぶ手慣れたる」

あお「まあね。私選ばれし者だし……」

轟雷「必ず勝ちます!!」

あお「頑張つてさつさと終わらせよ」

直後、セッションベースが発光。

轟雷「轟雷!!」

迅雷「迅雷!!」

ウルフ「ウエアウルフ」

バルチャー「バルチャー」

轟雷・迅雷「フレームアームズガール、セッション!!」

ウルフ・バルチャー「フレームアームズ、セッション!!」

轟雷「GO!!」

迅雷「いざ参る!!」

ウルフ「発進!!」

バルチャー「飛翔!!」

轟雷、迅雷は各部装甲パーツが装着され、ウルフの今回の装備は漸雷（通常型）である。

轟雷「轟雷、到来!!勝利オーライです!!」

迅雷「震える魂、高鳴るハートビート!!これが……我がパツションだ!!」

ウルフ「アーマー装着……漸雷、発進準備完了!!」

バルチャー「さあて……狩りの時間だ……!!」

フィールドは戦国時代の村を模したフィールド。

轟雷が警戒していた瞬間、迅雷が現れブーメランサイズで轟雷の脚に掛ける。

そのまま引つ張られる轟雷。

しかし轟雷は自力で脱出する。

ああ『だ、大丈夫轟雷!?!』

轟雷「はい、反撃します!!ウルフ、援護を!!」

ウルフ「了解」

轟雷は滑空砲を、ウルフは漸雷標準装備のマシンガン撃つ。

迅雷に直撃するが、すぐに態勢を立て直される。

迅雷「やるな!!」

ああ『轟雷、気をつけて!!』

迅雷が振るうブーメランサイズを轟雷は掴む。

しかし、迅雷は距離を取る。

バルチャー「俺もいるって事を忘れんなよ?」

ウルフ「ツ!!」

バルチャーの武装が振るわれ、危うく直撃する所だった。

迅雷「やるな轟雷!!」

轟雷「迅雷も流石です!!」

迅雷「だが、これでトドメだ!!」

轟雷「どうぞ、持ち帰ってください!!私の勝利を!!」

迅雷「甘いな!!師匠、援護を!!」

バルチャー「あいよ」

するとバルチャーは再度可変し、バードモードに。

直後高速で飛び回り、さらに迅雷は分身する。

轟雷「動きが速すぎて残像が……!!」

あお「うーん……速すぎてどれが本物の迅雷かわからないの?な
ら……全部に攻撃しちやえばいいじゃん!!えーと……そうだ、新
しい武器!!」

すぐさま新しい武器を取り出し、転送する。

あお『轟雷、これで全部に攻撃よ!!』

轟雷「わかりましたっ!!」

新しい武器を受け取り、構える。

迅雷「イヤアアアア!!」

轟雷「バイオレンスラム、ダブルキャノンモード!!」

轟雷はバイオレンスラムのトリガーを引き、迅雷とその分身、さらにバルチャーに直撃させる。

……しかし。

迅雷「うわああああ!?なんだこの威力は!?!」

バルチャー「俺が……避けられねえだと……!?!」

ウルフ「何故俺まで巻き込まrギヤアアアアア!?!」

迅雷とバルチャー、さらには巻き添えをくらったウルフのライフが0となる。

『Winner 轟雷』

ああ『上手く組み立てられたか自信なかったけど……』

しかし、バイオレンスラムは先程のエネルギーに耐えられず、ショートして壊れてしまった。

轟雷「壊れてしまいました……」

ああ「あちゃー……武器の組み立て方間違えたかなあ?こんな大爆発するはずじゃ……」

マークII「まー修理なら俺らに任しとけ」

ああ「ごめん、ありがとね」

バトルは終了した。

しかし…………。

迅雷「クソツ…………」

ああ「迅雷、大丈夫？私の組み立てた武器が誤作動起こしちゃったみたいでさ」

轟雷「私の勝利には間違いありません」

ああ「轟雷もごめんね。さ、データ収集はできたでしょ？」

迅雷「まだまだだ!!まだ足りない!!もつとバトルをしてデータを収集しなければ!!」

轟雷「何度やっても結果は同じです!!」

ああ「な、何故か負け知らずの私達…………」

轟雷「はい、ああ!!」

ステイ子「あのさく!?なに三人だけの世界にひたってるのよ!!相手ならここにいるでしょ!？」

バーゼ「ねえねえバーゼ退屈しちゃったよ。みんなと一緒に遊ぼう?せっかく迅雷も来てくれたんだし!!」

シロ「迅雷ちゃんって元気な子ねえ…………泣いたら凄く可愛いかも」

クロ「想像しただけで涎が出そう…………」

シロとクロがそう言うが、ジイダオがお仕置きをする。

ジイダオ「いい加減にしろお前ら」

シロ「あひっ」

クロ「きやんっ」

レイダオ「ジイダオ兄さんの拳骨痛いんだよなあ…………」

迅雷「お前たち黙れ!!第二戦は…………ステージ外で勝負だ!!」

ああ「え、私の部屋で!？」

ウルフ「ああ、心配する事は無い。我々FAやFAガールはエネルギーの衝撃度がステージ内とステージ外で異なる。つまり怪我をする心配も無い」

ステイ子「そういう事」

轟雷「では、迅雷はステージ外でもデータ収集をしたいと？」

迅雷「そうだ」

バーゼ「なんかそれ面白そう〜!!」

ステイ子「そうね」

シロ「うふふ……ウズウズする〜」

クロ「外の世界を支配するのも私達。ゆっくりいたぶりましょ？」

轟雷「ではやりましょ!!」

マークII「で、何すんだ？」

迅雷「それは……」

みんなが緊張する。

しかし、その緊張も無駄に終わる。

迅雷「……相撲だ!!」

ウルフ「なるほど、な」

その後、轟雷と迅雷で相撲をした、が。

結果はやはり轟雷の勝利だった。

こうして迅雷が仲間になった。

迅雷「狼よ、次は何をする？」

ウルフ「……サバイバルゲームでもするか」

『お部屋作りは楽しいな』

『お部屋作りは楽しいな』

……どうも皆さんこんにちはこんばんは、あおです。

突然ですが私は今、非常にイライラしています。

ついでに私の肩の上に乗っているゼルファイカール、ゼロもイライラしています。

……何故なら。

学校から帰ってきたと思ったらなんと轟雷達が部屋を散らかしていたの。

ステイ子が翔ぶ時、何気に鉛筆立てを踏み台にして倒したり……。

バーゼがルンバに乗りつつ爆走しながら歌ったり……。

何故か迅雷と轟雷が綿棒と鉛筆を持って戦いだしたり……。

挙げ句の果てにはシロとクロがカッターやハサミを入れている道具入れを持って、中身だけを落としたり……って普通考えて危ないでしょ!?

ただ、私の怒りが頂点に達すると同時にゼロの怒りが先に頂点に達しちやったみたいで……。

あお「部屋が……」

ウルフ「……?」

あお「部屋が汚あああああ!!」

ゼロ「掃除しろやテメエらゴルアアア!!」

マークII「ギャーツ!!ゼロがキレたああああ!!」

ゼロ「先にテメエらを掃除してやろうか、ええ!？」

ウルフ「お、落ち着けゼロ。怒りに身を任せても良い事は……」

ゼロ「じゃあテメエがイツらに言えやボケエ!!」

……うわあ。

とりあえず少し置いて。

ゼロ「……情けない……こんな事で声を荒げるなんて……」
ステイ子「き、キレたかと思っただけ急に静かになったわね……」
ウルフ「……それで、どうしたのだ？」

あお「どうしたのって、汚いの!!ぐっちゃぐちゃ!!もう最っ低っ!!
片付けて、いや片付けろ!!あんた達人人家でやりたい放題すぎ!!」

ウルフ「む……すまない……」

ウルフ君やマークIIなど、FA勢は反省しているみたいだけど
……どうも轟雷達は理解していないみたい。

バーゼ「あおがキレた」

ステイ子「確実に……」

轟雷「怒ってます……ね」

迅雷「威勢が良いな」

ゼロ「あのなあ……お前らが散らかしたくせによくそんな事が言
えるな……まったく」

ステイ子「う……」

あお「もうっ、我慢の限界です!!」

すぐに片付けを始め、数時間後には部屋が綺麗になった。
そして、私はある事を轟雷達に言った。

あお「私はこの漫画とかを古本屋さんに売ってくるから、君たちはここに自分たちの物を片付ける。いい？」

そう言っつて私は轟雷達の前に二つの棚を置く。

あお「棚とか家具とか必要なら管理人さんがくれたガラクト……じゃなくて材料が押し入れのダンボールに入ってるから、それぞれ勝手に作るように。あ、ゼロ。みんなの見張りよろしくね？」

ゼロ「わかった。任せてくれ」

轟雷達が私が置いた棚を見てこう言っつた。

ステイ子「これっつつつまり……」

バーゼ「バーゼたちの部屋？」

轟雷「そのようですね」

迅雷「ほう……面白そうだな」

シロ「楽しい事が……」

クロ「起きそうな予感……」

ウルフ「我々のガレージか……」

マークII「はー、なるほどねえ」

ジイダオ「レイダオ、レイアウトは決めてあるか？」

レイダオ「もちろんだよ兄さん。多分ぴったりだと思っつよ」

バルチャー「ま、片付けろっつつ言われてるから最低限の事はすっつかねえ」

そんな会話にも耳を傾けず、私は私の友達、武希子に電話する。

あお「あー武希子？私。今からブックスーパーサトウに漫画売りに

行くの。その後パフエおごるから合流しない？」

そう言っただけは外出した。

さて、あおがない間は俺がなんとかしないとな。

早速始めるか。

ゼロ「さて、いいか？俺たちの任務は二つ。一つはこの棚を使って部屋を作る事だ。まずは自分が何処を使いたいか決めろ」

迅雷「では自分は上から二段目を使う」

ステイ子「え、なんで？」

迅雷「苦無や縄梯子を使っただけ。それが鍛練というものだ……
だいたい轟雷などは飛ぶ事が出来ないだろう？」

轟雷「私は飛ばませんので一番下ですね」

ゼロ「よし、迅雷は二段目で轟雷が一段目だな」

シロ「うふふ、ちよつと悲しそうに言うのね」

轟雷「悲しそう、ですか？」

クロ「強がる姿も悪くない……」

轟雷「これが……悲しい……」

意外な所で轟雷が新たな感情を学んだ。

こんなふとした瞬間に学ぶ事もあるんだな……。

色々と物思いに耽っていると後ろの方で驚きの声。

迅雷「こ、これは……!!」

マークII「ジャパニーズカタナか？」

迅雷「ああ……む、槍もあるぞ!!」

マークII「こいつは……雛人形つてやつか」

バルチャー「なんでそんな物があんのかねえ」

バーゼ「すごいキレイイ!!お姫様がいるよ!!」

ステイ子「でも私の趣味じゃないわね……」

迅雷「自分の屋敷にびったりだ!!早速飾る!!」

そう言つて迅雷は自分の部屋に登り、早速部屋に飾る。

ウルフ「鏡餅もあるのか……衛生面が心配だな」

ステイ子「ちよつとバーゼ、遊んでないでちゃんとやんなさいよ!!」

バーゼ「遊んでないよ!!バーゼはお部屋作りのイメージトレーニング

中なのですっ!!」

クロ「あらあら難しい言葉使っちゃつて」

シロ「クロちゃん、意地悪な事言っちゃダメよ。泣いちゃうかも」

クロ「むしろ泣かせてみる？」

バーゼ「バーゼ強い子だから泣かないもん!!」

ステイ子「ていうかシロとクロこそ何もしてないじゃない!!」

ゼロ「え、と……お前ら部屋作りはどうしたんだ？」

シロ「ステイ子ちゃん、ゼロ君。本当に何もわかってないのね」

ステイ子「はあ？」

クロ「可哀想な子……」

ステイ子「くッ、ホントいちいち頭に来るんだけど!!」

クロ「あら、顔が真っ赤よ？」

シロ「そうムキにならないの……うふふ」

ステイ子「早く部屋をなんとかしなさいよ!!どうせ何も出来ないくせに!!」

クロ「私達をみくびるなんて愚か過ぎて言葉も無いわ」

ステイ子「はあ!?訳わかんないし!!」

シロ「わあ〜ステイ子ちゃんが怒ったあ〜、怖〜い」

クロ「何？私達をゾクゾクさせたいの？うふふ……悔しいの？怒れば？ねえ、怒りなさいよ」

シロ「ねえ早く怒って？それとも泣く〜？」

ステイ子「う、ううう……」

あの二人は相変わらずだな……こちらとしてもかなりムカつく。しかし、ジイダオが前に出る。

ジイダオ「おい」

シロ「なあにジイダオお兄s」

ジイダオ「いい加減にしろ……!!」

パンツ、とジイダオがシロとクロの頬を叩く。

一瞬何が起きたのか理解が出来なかったようだ。

クロ「何……するの？」

ジイダオ「まだ、わからないのか？お前たちがした事が」

シロ「……？」

俺も気になったので振り向いて見てみる。

……泣いていた。

かなりガチな方で。

ゼロ「だ、大丈夫か……？」

ステイ子「ぐすつ……大丈夫よこんなの……」

クロ「ほ、本当に泣いちゃったの？」

シロ「どうしましょう……」

ジイダオ「謝れ。他人に迷惑をかけるのは決してダメではない
……が、それでも常識という物がある。気をつける事だ」

そう言つてジイダオは作業に戻つていった。

え、なんなんだアイツ、凄くカッコいいじゃん。

シロ「えつと……」

クロ「……ごめんなさいね」

ステイ子「いい、気にしてないから大丈夫よ……」

そんな事に脇目も振らずに作業をしていた轟雷が戻ってくる。
どうやら作業が終わつたみたいだ。

轟雷「出来ましたっ」

ステイ子「え、はやっ!」

ゼロ「もう出来たのか?」

轟雷「はい、こちらです」

見せられた轟雷の部屋は、なんとというか、殺風景というか、シンプ
ルで良いというか……。

バーゼ「え、轟雷のお部屋これでおしまい?」

轟雷「はいっ!!」

ステイ子「これじゃ武器庫でしょ!」

轟雷「これなら一目で何処に何があるのかわかります。バトルの準
備をするあおのためです」

ステイ子「それはわかるけど、いくらなんでも殺風景過ぎない?」

轟雷「殺風景……うーん、何が足りないのかがよくわかりませ
ん……」

バーゼ「じゃあこのクマさん置いてみるとか!!」

バーゼが試しに置いてみる。
が、尋常ならない違和感が残る。

ステイ子「なんだろう、この違和感……」

マークII「し、シユールだな」

ステイ子「ま、まあ何も無いよりはマシじゃない?」

轟雷「そうでしょうか?」

ステイ子「とりあえず置いときましょう」

ウルフ「……轟雷」

轟雷「あ、なんですかウルフ?」

ウルフ「……これを」

そう言つて轟雷に一輪の銀色の花?を渡すウルフ。
渡された花をよく見てみる。

バーゼ「……あっ!!これ金属で出来てる!!」

ステイ子「え、嘘!」

轟雷「ウルフ、これは?」

ウルフ「ある時暇だったのな。試しに造つてみたのだ。気に入つてくれればいいのだが……」

轟雷「はい、気に入りました!!大事にしますねウルフ!!」

ウルフ、お前もジイダオと同じくカツコいいなオイ。

やる事が男だよ。

ステイ子「良かったじゃない轟雷、凄いの貰えて」

轟雷「はい!!」

バーゼ「さあて迅雷はどうかな?」

二段目に上がると、完全な武家屋敷のようになっていた。
なにこれすげえ。

ステイ子「うわ、本格的な和室!!武家屋敷じゃない!!」

迅雷「ふつ、ただの武家屋敷ではない。忍者屋敷だ!!」

マークII「おほー、すげえ、こりやいいな!!」

マークIIがどんでん返しでパタパタと遊ぶ。

確かに凄いな。

ステイ子「そ、想像以上に……」

バーゼ「すごすぎる……」

クロ「でも女子力0」

シロ「女捨てちゃったの?」

迅雷「なんとでも言え。自分は大満足だ」

バルチャー「んじゃあこれも置くか」

そうやってバルチャーはプラ製の活け花を飾る。

あ、女子力無い部屋に置かれるとすげえ華がある。

ステイ子「……アンタセンスいいわね」

バルチャー「流石に女子力無い部屋に住まれるのも師匠としてどうかと思ったからな」

ステイ子「じゃ、次はバーゼの部屋……ってなにこれ!?ゴミ屋敷じゃない!!」

バーゼ「ゴミ屋敷じゃないよ!!バーゼには全貌が見えてるもん!!」

マークII「キャンディーや金平糖……んで、チョコレート箱

……あ、なるほど。こりやお菓子の家をイメージしてるのか」

ステイ子「それにしたって酷すぎる……」

シロ「あら、バーゼちゃんにはとってもお似合いよ？自由奔放で」
クロ「シロ姉様、嫌味のレベルもうちよつと下げて」
バーゼ「これが可愛くて、素敵なお部屋に近づいてるんだなく」

そう言つてバーゼラルドは壁にペンキを塗つたくる。

シロ「バーゼちゃん、この柄はなあに？」

クロ「とつても趣味の良い壁ね」

バーゼ「でしょ？いちご柄だよ。ベッドとかテーブルとか良い感じに作れたんだよ」

と、バーゼが説明しながら作業を進める。

だがしかし、シロがルンバをわざと起動させる。

《ゴミを発見しました!!》

シロによつて起動させられたルンバがバーゼラルドの部屋にある物をゴミと誤認識し、迫る。

バーゼ「え？うわあ!!ゴミじゃない!!」

シロ「うふふ、ゴミだつて!!」

バーゼ「違うよお!!」

クロ「あなたの最高傑作はゴミだつて認識されたみたいだけど？」

バーゼ「ひどくい!!」

すぐさまジイダオが動き、ルンバを止める。

ジイダオ「言つたはずだ……悪ふざけが過ぎるぞ……!!」

クロ「お、おかしいわね……ジイダオ兄様の背後に閻魔大王が見

えるわ……」

レイダオ「あれほど怒らせたらダメだって言ったのに……」

ステイ子「ま、まあバーゼにしては上手くできたんじゃない？そのベッドとか」

バーゼ「ベッドじゃない!!どー見てもカッコいいソファーだよ!!」

ステイ子「あ、ごめん」

バーゼ「みんなひどくい!!もうバーゼお部屋これでいいもん!!わーい!!ごろごろ!!わーい!!」

ステイ子「バーゼ、本当にそれでいいの?」

バーゼ「良い居心地だよ!!いつでもバーゼのお部屋に遊びに来て!!」

ステイ子「うん、遠慮しとく!!」

満面の笑みで否定したステイ子。
流石である。

バーゼ「じゃーステイレットのお部屋にお邪魔しまーす!!」

ステイ子「散らかさないですよ?」

続いてはステイ子の部屋。

ダンボールを加工して机や椅子が置かれ、さらに青い壁紙を貼ったいかにも女の子らしい部屋に仕上がっている。

あれ、確かマークIIもこんな感じだったか?

ただ、使った素材は小さな木材の切れ端だが。

轟雷「なんというか、ステイレットらしい部屋だと思います!!」

ステイ子「FAガールたるものDIYくらい出来ない!!Do it yourself!!さっすが私!!」

マークII「おお、やはり同志がいたか!!やっぱそうだよなあ!!」

ステイ子「ええ!!というかアンタどうやったのよ、教えなさいよ」

マークII「あー、じゃあギブアンドテイクでステイレットちゃんのダンボール活用法教えてくれよ」

ステイ子「わかったわ。えっと……」

バーゼ「お見事〜!!おしやれ〜!!」

クロ「へえ、意外と器用なのね?」

シロ「うふふ、顔に似合わず私達の家に必要な時は作らせてあげようかしら?そこのマークII君にも、ね?」

マークII「あ、ウルフ。そういやお前の部屋は?」

ウルフ「ああ……自分は不器用なものでな。こんな部屋しか作れなかった」

ウルフの部屋に行く。

……なんだこれ、マジな武器庫じゃねえか。

しかもフレームを針金の切れ端を使って自作、普段使わないアーマー……そう、漸雷とか榴雷とかのアーマーを装着して飾っている……というより防具立てみたいになっている。

さらには針金を網のように作り、フックを付け、壁にかけている。

そのフックの上に各武装を置いている……。

この時、満場一致でこう言った。

ウルフ以外『マジな武器庫じゃねえか(じゃないのよ/じゃないですか)』

ウルフ「うん?」

ステイ子「まあいいとして……なんでアンタたち姉妹は何もしてないのよ?兄弟のアイツらはもう作り終えたのに」

そう、ジイダオとレイダオの部屋は中国文化が取り入れられたいかにもチャイナな部屋に仕上がっていたんだ。

しかし、何故姉妹が何もしてないのかが謎だ。

クロ「だって手が汚れるのは嫌だし」
シロ「爪がいたむのよね」
バーゼ「二人はお部屋いらないの？」
クロ「……そろそろ届く頃ね」
ゼロ・バーゼ「へ？」

すると窓からドローンが入り、荷物を落として何処かへ飛び去っていった。

そして、手際良く二人は荷物を開け、着々と部屋を作る。
そして……。

ステイ子「す、すご……」

マークイー「まさかのドールハウスかよ……」

クロ「イメージ通りね」

シロ「私達にぴったり」

バーゼ「ドールハウスかあ……その手があったか!!」

轟雷「これを注文したんですか？」

クロ「そうよ？」

シロ「ネット通販くらい誰でも出来るでしょ？」

……ん？

ネット通販……まさか……!?

そう考えると同時に、ジイダオが聞く。

ジイダオ「……料金はどうした？」

シロ「え？料金なんて……」

シロが言いかけた所にあおが帰ってくる。

あお「ただいま〜!!」

ウルフ「で、どうだったのだ?」

あお「いやあ、あの食べっぷり……流石武希子はタダ者じゃないなあ。あ、お部屋はどう?」

ウルフ「ああ、完成している。見てみるといい」

部屋を見た途端、カバンを落としてあおは驚く。

あお「うわあ〜!! 凄い、何処から突っ込んでいいのかわからないけど凄い!!」

ステイ子「でしょ?」

迅雷「だがまだ変化の余地はある」

バーゼ「バーゼも頑張ったんだよ!! 褒めて褒めて〜!!」

轟雷「これでバトルが捗りそうです!!」

シロ「支払いは〜」

クロ「あおちゃんの口座から引き落としになってるわ」

あお「へ? 私の口座から? 引き落とし?」

シロ「そうよ。そのためにあおちゃんが私達のデータを収集しているんだから」

あお「って私のお金かああああ!! というか私のアルバイト代が!!」

ジイダオ「……伝票、見せろ」

クロ「はいこれ」

ジイダオ「……!?!」

ジイダオが固まる。

それほどヤバいんだろうな…………。

シロ「今までのアルバイト代でなんとか足りたから大丈夫よ」

あお「た、足りた…………？足りたとは…………？」

クロ「本当はペロアなカーテンも欲しかったんだけど…………」

シロ「データ収集の報酬じゃ足りなかったから来月まで我慢してあげる」

あお「使い果たしたんか…!!」

轟雷「で、でもみんなの部屋ができてすつきりしましたね、あお!!」

あお「いや、もう…………二部屋空いているのが何かのフラグとしか思えない…………」

確かに、FA勢の棚が一部屋、FAガール勢の棚が一部屋空いている。

あお「今までの分タダ働き…………漫画売った分も武希子に奢っちゃったし…………」

…………今まさに、あの馬鹿姉妹のせいでストレスがマツハでぶち抜き、あおがキレた。

あお「私には金が無いんじやああああ!!お前たち早くたたくたくえくつ!!」

これはマズイな…………仕方ないか。

ゼロ「仕方ないな…………あおちゃん、ここは俺が一肌脱ぐよ」

あお「…………へ？」

ゼロ「シロ、クロ。俺と戦え」

シロ「あら？あなた一人で戦うつもり？」

クロ「私達には攻撃はあたらないわよ？」

ゼロ「……何も俺の姿が1つだなんて言っていないだろう？」

この時、俺が人間だったら、かなり不敵な笑みを浮かべていただろう。

だが、アレは本当ならまだ使いたくなかったんだが。

『二つのゼロ（レイ）』

『二つのゼロ（レイ）』

あお「……………よし、準備できたよ」

ゼロ「ん、ありがとな」

シロ「クロ、準備はいい？」

クロ「ええ、いつでも。すぐにでも彼を壊せるわ」

轟雷「ゼロの装備は……………バーゼラルドの武装、ライフルが二挺？
後は強化装甲だけみたいですね」

ウルフ「ゼルファイカールは堅実に攻めて相手の虚を突くFAだから
な。必要最低限の武装しか持たんのだ」

あお「え？それって大丈夫なの？」

マークII「ライフルの弾が切れたらアウトだな……………だけどアイ
ツ、まだ何かを隠してる」

迅雷「隠している……………つまり別の武装を持ち合わせている、と？」
ステイ子「そう考えれば妥当ね」

バーゼ「じゃあ早速ゼルファイカールの実力見てみよ〜!!」

ゼロ、シロ、クロがそれぞれのセッションベースに乗る。

直後、セッションベースが発光。転送準備が完了した合図である。

ゼロ「ゼルファイカール」

シロ・クロ「マテリア」

ゼロ「フレームアームズ、セッション!!」

シロ・クロ「フレームアームズガール、セッション!!」

ゼロ「テイクオフ!!」

シロ・クロ「行きましよう?」

三体同時に転送され、マテリア姉妹は各自武装を取り、ゼロはライフル二挺を手に持った直後、カメラアイが光る。

ゼロ「全てを……ゼロにする!!」

シロ・クロ「「さあ……可愛がってあげる」」

今回のフィールドは洋館の屋根上。

月が明るく照らしている。

ゼロ「翔ぶ……ブースト!!」

クロ「シロ姉様、動きを止めて」

シロ「任せて、クロ」

高速飛行するゼルファイカールの脚にシロがブーストマスターソードを蛇腹状で巻き付かせる。

これにより、大きく減速してしまう。

ゼロ「チイツ!!」

ゼロはライフルでシロを狙って撃つが、クロのグラインドサークルにより弾かれてしまう。

クロ「ほらほら、どうしたの?」

シロ「バトルする前の威勢は何処に行っちゃったの?」

クロ「もしかして失せちゃった?」

シロ「なら、壊してもいいわよね?」

ここからゼルフィカールの防戦一方。
ライフルで撃てども弾かれ、肉弾戦で挑めど痛めつけられる。
まさに一方的な戦いだった。

ああ「ど、どうするの？このままじゃゼロ負けちゃうよ？」
ウルフ「例えそうだとしても、私は信じる。それだけの事だ」
マークII「いつたいどうやって勝つつもりか見せてもらうぜ、ゼ
ルフィカール」

クロによつて打ち上げられたゼロは、シロのビーストマスターソ
ドで叩き落とされる。

シロ「これでおしまい……さようなら!!」
ゼロ「ぐがあつ……!!」

叩き落とされたゼロはそのまま重力に従つて屋根上に落ちる。
動きが見えない事から、マテリア姉妹は勝利を確信した。

クロ「あつけなかつたわね」

シロ「そうね。大口を言うあたりどんな力か期待したけど……」

ああ「も、もしかしてもう負けちゃつたの……？」

ジイダオ「……なら、何故アナウンスが流れない？」

ああ「え？」

ジイダオ「戦闘が終わつたはずならアナウンスが流れるはず……
つまり」

ジイダオがそう言った直後、小爆発が起きる。

マテリア姉妹は爆心に注目する……が、何もいない。

倒れたゼルファイカールすらも、いない。
その戦いの様子を見ていた彼ら、彼女らも困惑する。

シロ「いったい何処に行ったの……？」

クロ「……!!シロ姉様、上よ!!」

シロ「上……!!」

マテリア姉妹が視線を空中に移す。

その視線の先に、見た事も無いFAが滞空していた。

……その妖艶な紫色の輝きを放つ翼を、月の光に照らされながら。

シロ「……何者なの？貴方は」

レイファルクス「……これが、もう一つの俺だ」

クロ「まさか……ゼロ君!？」

あお「うえええ!？」

マークII「……あ、落ちた場所にアイツのアーマーがある!!」
ステイ子「と、言う事は……あのアーマーの中にアレが入っている、アーマーパージした際に翼を転送したって事？」

ウルフ「だろうな……久しぶりに見たぞ、ゼロの本気を」

バーゼ「え、じゃあ今まで手加減してたの？」

ウルフ「……ああ」

ジイダオ「手加減していた、というより正体を隠していた、ではないのか？」

あお「あー、よくあるヒーロー番組みたいなの？」

マークII「あー、あれは燃えるよな。かなり熱い展開つつうか」

そんなどうでもいい会話をしている間に、ゼルファイカール……いや、彼の真名『レイファルクス』が言う。

レイ「……あまり使いたくなかったんだけどな……大人げない
と思われてしまうかもしれないし」

シロ「つまり、今の貴方なら余裕って事？」

レイ「まあ、そうなるかな」

クロ「なら、壊しがいがありそう……!!」

シロ「やあっ!!」

ビーストマスターソードを振るうシロ。

通常、蛇腹剣はしなるため攻撃範囲は非常に広く、さらにあてやす
い事で知られている。

つまり、通常では避けにくいという事。
だが。

レイ「……時計の短針のように遅いな」

シロ「ツ!!」

レイファルクスは、違った。

彼自身の体感速度が速いのか、難なくかわしてシロの背後に立っ
ている。

すぐさまシロはビーストマスターソードを通常形態に戻し斬りか
かるが、彼の翼から生成された大剣で受け止める。

受け止めた隙を狙ってクロがグラインドサークルを用いて突撃す
るが、大剣を片腕で支えて、さらに翼から生成されたリッパーを飛ば
し牽制する。

クロ「凄い……貴方、面白いわ!!」

レイ「褒められたものじゃない……俺は、特別でなくていい、平
凡でいたいんだよ」

シロ「どうして、今まで、隠していたの？」

お互い攻防しながら問答を続ける。

……そして。

レイ「……悪いけど、これで終わりだ」

シロ「久しぶりに……楽しめたわ。またやりましょう？」

クロ「今度は、本気でね」

レイ「……ああ」

レイが大剣を振るい、シロとクロのHPを0にする。

『winner レイファルクス』

レイ「……ふう……プットオン」

ああ「わ、自動で装着されるんだ……」

ウルフ「我々FAをただの機械だと思ってもらっては困る」

ああ「あはは……ごめんごめん。でもこれでアルバイト代は稼げ
た……わーい!!」

ゼロ「本当、欲望に忠実だな。ああちゃん」

ああ「あたりまえだよ。あ、シロとクロもありがとね」

シロ「当然の事よ。まあ私達が迷惑かけてしまったから、ね」

クロ「あの後ジイダオ兄様にお仕置きされちゃったし……次から
気をつけるわ」

マークII「お仕置きって……何されたんだ？」

轟雷「確かに。私も気になります」

シロ「うふふ、内緒よ？」

クロ「真実を知っているのは私達姉妹とジイダオ兄様だけだから」

シロとクロは微笑みながら轟雷に言う。

マークIIは……ステイ子にしばかれている。

マークII「あああああごめん、悪かったってえのお!？」

ステイ子「本っ当に 안타サイテー!!」

マークII「や、やめてくれ、そんなぶつといパイルバンカーでトツツキしないでくれ、頼む!!」

ステイ子「問答無用って言葉知ってる?」

マークII「: : : o h m y g o d」

ステイ子「だあっ!!」

マークII「アーーーーーッ!!」

バーゼ「あはは、仲良いね二人とも」

ステイ子「良くないわよ!!」

: : : まあマークIIがトツツキされた事は置いて: : : : :
れでおおちゃんが お金で困らないだろうな。

よほど無駄遣いしなければ、だが。

ゼロ「: : : あおちゃん、一応言っておくけど」

あお「無駄遣いするなって事?」

ゼロ「そう、計画的に使うんだ。いいね?」

あお「あ、あははは: : : 善処しまーす」

『アーキテクト&セカンドジャイヴ起動』

『アーキテクト&セカンドジャイヴ起動』

X日目

記録者 ウエアウルフ

気候 快晴

各機体の状態

・轟雷

異常無し

・ステイレット

異常無し

・バーゼラルド

異常無し

・マテリア

異常無し

・マテリア

異常無し

・迅雷

異常無し

・ウエアウルフ

異常無し

・スーパーステイレット

異常無し

・ゼルファイカール及びレイファルクス

異常無し

・ジイダオ

異常無し

・レイダオ

異常無し

・バルチャー

異常無し

現マスター

源内あお

以上

上記記録を元マスター・源内浩太に転送する。
データ送信開始。

……データ送信完了。

再起動作業開始。

……再起動完了。

ウルフ「……ふう」

マークII「終わったのか？」

ウルフ「ああ。最近良いデータが取れているからな」

マークII「そうか。ま、あんまり無理すんなよ」

ウルフ「承知している」

休日。

先日訪れた迅雷が轟雷に再戦を申し込む。

今回は私も参加させられる事となった。

仕方がないので、今回は漸雷強襲型装備で出撃する。

轟雷「轟雷!!」

迅雷「迅雷!!」

ウルフ「ウエアウルフ」

轟雷・迅雷「フレームアームズガール、セッション!!」

ウルフ「フレームアームズ、セッション」

轟雷「Go!!」

迅雷「いざ参る!!」

ウルフ「出撃する!!」

セッションコールと同時に転送され、彼女達は装備を装着。

私は漸雷強襲型装備を装備する。

轟雷「注ぎます!!今日のトキメキ!!はじけます!!私のキラメキ!!」

迅雷「再びの鼓動!!熱き炎は馬となり我は高みへ駆け上がる!!」

ウルフ「ここが……この戦場が、私の魂の場所だ!!」

転送後、今回のバトルフィールドは闘技場のようだった。

迅雷「今日こそは勝つ!!」

轟雷「そうはさせません!!」

迅雷「でりやああああああ!!」

即座に迅雷がブーメランサイズを振るい、轟雷に仕掛ける。

だが私が轟雷の前に立ち、漸雷強襲型装備である特殊防御布で凌ぐ。

迅雷「何いッ!?!」

ウルフ「申し訳ないが今回の相手は私だ。付き合ってもらおうぞ」

迅雷「良いだろう……かかって来い!!」

私が独断で装備した背部小型コンテナから大型ブレードを取り出し、つばぜり合う。

迅雷「やるな……流石私達FAガールとは違うな!!」

ウルフ「そちらこそ、な。だがまだまだだ」

直後、ブレードで押しきった私は迅雷を大きく後退させる。

轟雷「ウルフ、避けてください!!」

ウルフ「了解」

轟雷が頭上に手を伸ばし、セレクターライフルを転送。転送されたセレクターライフルでトドメの一撃を放つ。

だが、迅雷も只ではやられまいとブーメランサイズを投擲してセレクターライフルを弾き飛ばす。

迅雷「まだまだ、まだまだだ!!」

轟雷「あれをかわすなんて……流石です!!」

さらに追撃を仕掛けようとした時、爆煙の中から正体不明機が現れた。

轟雷「え?」

迅雷「何者だ?」

爆煙の中から現れた正体不明機は、どうやらバイクに股がついているFAガールのようだった。

轟雷「貴女は?」

アーキ「アーキテクト」

轟雷「アーキテクト……私は轟雷です」

迅雷「お主、いったい何処から来たのだ?」

アーキ「質問の意味不明」

迅雷「意味不明だと……?」

轟雷「貴女はFAガールなのですか?」

アーキ「肯定。バトルによるデータ収集開始」

迅雷「バトルだと？」

轟雷「どうやら戦わねばならないようですね……………」

迅雷「謎の敵の出現、か」

轟雷「状況はよくわかりませんが、受けて立ちます!!」

迅雷「自分もだ!!」

アーキ「戦闘サブルーチン実行。セカンドジャイヴ、援護を」

すると彼女がバイクから降りた瞬間、バイクが変形。

一瞬で人型になる。

ウルフ「…………やはりFAだったか」

迅雷「な、乗り物に変形したぞ!」

轟雷「まさか…………彼とも戦わねばならないのですか!」

ウルフ「相手がどうであれ、やるしかあるまい」

直後アーキテクトが一瞬で姿を消す。

瞬間移動のようだ。

迅雷「なツ!」

ウルフ「マズイ…………来るぞ!!」

我々の戦闘を見ていたあおも状況が理解出来ていないようだった。

あお「え、何?どういう事?」

クロ「ねえ、まさかあおちゃん」

シロ「うふふ、何も知らないのね」

あお「え?シロとクロは知ってるの?」

シロとクロが淡々と述べる。

クロ「もちろんよ。全ての起源、私たちマテリアがいて」
シロ「その次にあの子がいるの」

ああ「え、ええ………?」

そこにバーゼラルドが割り込み、わかりやすく説明する。

バーゼ「説明しようっ!!マテリアシロクロお姉ちゃん、そして突如現れたアーキテクト!!彼女たちの存在あつてこそバーゼたちなのである!!」

ああ「ますます意味がわからないんだけど………」

ステイ子「なるほど、そういう事ね」

ああ「え、ステイ子も知ってるの!?!」

ステイ子「聞いた事があるのよ。実機を持たずにプログラムされたデータを起動するためだけに現れるって」

ああ「はあ」

ステイ子「全然わかってないでしょ、このアホっ子!!」

ああ「アホっ子言わないでよ!!あ、でもさ………いつものバトルよりなんか特別感あるよね。って事はさ、きつと報酬も良い訳じゃん!!
ね、ね!?!」

バーゼ「うむ、そうだと思われる!!」

ああ「やっぱり?そういう事ならなんだか張り切っちゃうなあ
!!」

マークII「んな事言ってる場合かっつての」

ああ「え、なんで?」

マークII「アーキテクトだけじゃねえ。さらにアイツがいるから
そう簡単には勝てねえぞ」

ああ「アイツ?」

ゼロ「セカンドジャイヴ。俺たち飛行型FAを抜くと最強の機動型
FAだ。特に恐ろしいのは………」

ジイダオ「機動型の割に豊富な火力」

レイダオ「さらに火力に振り回されない機動力」

バルチャー「んで、サクサクと制圧していくんだよ。アイツは」

あお「え、それってヤバくない？」

マークイー「……はつきり言ってヤヴァイ」

あお「えくくくく!!」

そんな事を話していた彼女達から視点が変わり、我々は苦戦を強いられている。

セカンドジャイヴの各部にマウントされている武装により、深刻なダメージを受けている。

ウルフ「グウツ……!!」

セカンド「次弾装填、ばらまく」

ウルフ「グウアツ!!」

セカンド「……ショットガンはどうやら有効らしいな」

ウルフ「まだ、終わっていない!!」

ガトリングガンを取り出し、威嚇射撃をする。

だが、セカンドジャイヴの持ち前の機動力の前には無駄だった。

セカンド「データによれば元マスターの最高傑作と聞いていたんだが……期待外れだったか」

ウルフ「くっ……」

アーキ「分身サブルーチン実行」

轟雷「分身、まさか!!」

するとアーキテクトが三人に分身、轟雷と迅雷にダメージを与える。

迅雷「くっ、どうやら残像で多数に見せている訳ではないようだ……!!」

轟雷「確かに、どれも本物のアーキテクトのようですよ!!」

迅雷「どうする!?!」

轟雷「必ず弱点はあるはずですよ!!全て書き込まれたプログラムで動いているという事は!!」

迅雷「成る程、想定外の事には対応できない!!そういう事だな!!」

轟雷「その通りですよ!!」

轟雷が地面に向けて滑空砲を撃ち、煙幕を張る。

轟雷「ああ、バイオレンスラムを!!」

ああ「よし、任せて!!」

直後バイオレンスラムが転送され、スパイクハンマーへと変形する。

轟雷「これで!!」

地面を強く叩き、煙幕をさらに張る。

これによりアーキテクトは大きく油断する。

その隙に轟雷がスパイクハンマーを用いて数体撃破する。

その頃私はまだ、セカンドジャイヴに苦戦している。

だが、ようやく攻略の糸口が掴めた。

セカンド「ジ・エンド……!!」

ウルフ「……せいっ!!」

セカンド「!?!」

ヤツが一瞬動きを止めた瞬間に脚を掴み、固定する。
ここでとっておきの武装が使える。

ウルフ「機動型ほど薄い装甲は無い……!!」

セカンド「ま、待て!!まさかお前!!」

ウルフ「その……まさかだ!!」

セカンドジャイヴの胸部装甲にある物を押しつけ、衝撃を与えてセカンドジャイヴを吹き飛ばす。

セカンド「ガッハ……!!?」

ウルフ「……試作型だが物凄い威力だな」

そう、ある物とは”パイルバンカー”である。
しかも試作型。

それを両腕に取り付けて炸裂させたのだ。

セカンド「この……変態があ……」

ウルフ「どうとでも言うがいい」

セカンド「クソツ……」

……どうやら気絶したようだ。
さて、あつちはどうだ?

ふむ、どうやら三体のアーキテクト相手に上手くやっているようだ。
だ。

スパイクハンマーで地面を叩き、スパイクハンマーの上に迅雷が乗り……直後、スパイクハンマーを打ち上げて迅雷を飛ばす。

この連携攻撃により、アーキテクトのライフが尽きた。

轟雷「迅雷、大丈夫ですか迅雷!？」

迅雷「ああ、問題無い。アーキテクトは？」

轟雷「消滅しました。私たちの勝ちです!!」

迅雷「そうか、良かった……!!」

ウルフ「そっちは終わったようだな」

轟雷「あ、ウルフ……!？」

迅雷「わざわざ其奴を引きずってきたのか？」

ウルフ「ああ、聞きたい事が山程あるからな」

セカンド「……はっ、バトルは!?!どうなった!?!」

ウルフ「お前の負けだ、セカンドジャイヴ」

セカンド「そう、か……」

ウルフ「1つ、聞いておきたい事がある」

セカンド「……なんだ？」

セカンド「ジャイヴがここにいる、という事は恐らく元マスターは……」

ウルフ「お前の元マスターは、誰だ？」

セカンド「誰って、そりゃ源内浩太だろ。お前もそうだろ？」

ウルフ「……やはりか。あの人が考えそうな機体構成だ」

セカンド「ああ。なんでもコンセプトは”颯爽と戦場に現れ、敵に大打撃を与えた後にバイクに変形して華麗に離脱する”ってヤツだ」

ウルフ「……」

セカンド「……ま、結局お前には勝てなかった訳だが。流石、元マスターの最高傑作だよ」

ウルフ「そうか。ところでアーキテクトは？」

轟雷「私たちが倒しました。きつとアーキテクトは私たちは空中戦

が出来ないというデータだったのでしよう」
迅雷「力を合わせれば空だって飛べる」

ふと、私が振り返る。

その目の前に、消滅したと聞いたはずのアーキテクトが棒立ちして
いたのだ。

轟雷「あ、アーキテクト。素晴らしいバトルでした」

迅雷「お主やるなあ!!」

アーキ「敗北データ読込不可能……リロード……リロード
……過去データ、無し……」

轟雷「どうしたのでしょうか？」

迅雷「今まで負けた事が無いからプログラムが壊れたのではないか
？」

セカンド「負けず嫌い、って事か」

だが、彼女は衝撃的な一言を放つ。

プログラムが終了出来ず、さらには再起動が出来ないと言う。

我々が焦る中、轟雷は何か確信に満ちた表情をしていた。

……嫌な予感がする。

轟雷「大丈夫です、任せてください」

迅雷「どうやって？」

轟雷はアーキテクトに歩み寄る。

そして。

轟雷「私にはデータがあります。これはショック療法という物です」

アーキ「……?」

直後、彼女はアーキテクトの頬にキスをする。
フィールド外の皆は驚いている事だろう。

マークII・ゼロ「ブフーーーーーッ!!」

ジイダオ「なんと破廉恥な……」

レイダオ「兄さん、顔が隠れてないよ」

バーゼ「うはー、轟雷はやる事が違うなあ」

ステイ子「あわわ……」

さらに轟雷はアーキテクトにハグをする。

轟雷「そしてこれは友情の証。良いバトルをすると友情が生まれる……ここでみんなと出会って学んだ事です」

直後、アーキテクトの様子に変化が。

アーキ「……プログラム、再起動」

迅雷「確かに良いバトルだった。歴史に残る戦いと言えよう」

轟雷「またここで会いましょう、アーキテクト」

アーキ「……会えない。本プログラムは現時点を持って終了する」

轟雷「次に会う貴女は別の貴女という事ですか……なんだか寂しいですね」

迅雷「そうだな。だがバトルのデータは残るのだろうか?」

轟雷「友情の証も記録してくださいね?」

アーキ「友情の証……肯定」

迅雷「戦いならいつでも受けて立つぞ」

アーキ「次のバトルは……必ず勝つ。データは、残っているから」
轟雷「待ってます。約束ですよ」

アーキ「約束……肯定」

そうして彼女は本当に消滅してしまった。

やはりいかなる時でも別れはつらいものである。

だが、そんな寂しい雰囲気も現マスター・源内あおの一言で台無しになる。

あお「いやあ熱いねえ〜!!いい物見せてもらったよ!!これでアルバイト代も入るんだからデータ収集はやめられないんだよなあ〜!!」

ジイダオ「……………」

レイダオ「……………」

セカンド「……………KY」

マークII「その一言が無けりや最高だったんだけどな……………」

バルチャー「という訳であおちゃん、アウト」

あお「へ?」

どうやらバルチャーがいつの間にか設置していたタライ落としを
作動、見事にあおの頭上にあたる。

あお「つたあ〜……………なんでえ〜?」

ウルフ「……………よく自分で考えろ」

バーゼ「しつかしバーゼもアーキテクトに会いたかったよ〜。いい
なあ〜」

ステイ子「出現はランダムみたいだし、気長に待つしかないわね」
バーゼ「今度は別のアーキテクトだね〜」

あお「いたた……………でも記憶が無くて記録が残ってる。ね、轟雷

？」

轟雷「はい、あお!!」

ウルフ「……強くなったな」

轟雷「ウルフほどではありませんよ。まだまだ私は未熟です。だから……ウルフ、これからもよろしくお願いしますね」

そう言っただけで彼女はまぶしい笑顔を私に向けた。

私かもしれない人間なら、間違いなく顔が紅潮するだろう。

ウルフ「……ああ」

轟雷「えへへ……」

バーゼ「あれ？もしかして良い感じですかあ？」

轟雷「えっ？」

バーゼ「だつてだつて、ウルフの動きがちよつとぎこちないもん」

轟雷「そうなんですか？」

バーゼ「うんっ!!」

彼女たちが何かを話していたがその直後、インターホンが鳴る。どうやら何か荷物が届いたようだ。

あお「荷物が届いた……？」

あおが荷物を開ける。

だが、その中身がかなり衝撃的な物であった。そう。

中身はアーキテクトだったのだ。

箱が開けられた瞬間、彼女が起動する。

轟雷「アーキテクト!？」

アーキ「プログラム名アーキテクト、共同生活を開始」

FAガール勢『ええー！ー！ー！』

轟雷「アーキテクト……!!」

ステイ子「ようこそ!!」

迅雷「うむ!!」

バーゼ「にやつははく!!」

シロ「あらいらつしやい」

クロ「歓迎してあげる」

ウルフ「これからよろしく頼む」

マークイー「へへっ、よろしくな!!」

ゼロ「ま、馬鹿ばかりに見えるけど根は良いヤツばかりだからさ。
よろしくな」

ジイダオ「……よろしく」

レイダオ「よろしくね、アーキテクトちゃん」

バルチャー「変人ばかりだが気にすんなよ？」

セカンド「そーいやなんで俺の上に股がつたんだ？」

アーキ「気分」

セカンド「おお、気まぐれえ」

ああ「いやいらつしやいって、実機あつたのお!？」

シロ「うふふ、まさか本当に出来ていたなんてね」

轟雷「部屋はここが空いてますよ」

ウルフ「セカンドジャイヴ、お前の部屋はここだ」

セカンド「お、サンキュー」

……記録追記

セカンドジャイヴ、アーキテクト参入。

これから一層のデータ収集が捗ると見られる。

以上

上記記録を元マスター・源内浩太に転送する

転送開始

：：：：転送終了。

システム、シャットダウン

『愉快なおつかいレース』

『愉快なおつかいレース』

システムリブート

各部武装問題無し

状態は良好

ウエアウルフ、アクティブ

これより記録を開始する

×月×日

天候は晴天也。

FAガール、FA共に異常無し。

現マスター・源内あおの健康状態は良好。

報告内容としては足りない物と思われるが、中々に興味深いデータを取得できた。

元マスター、源内浩太は『スクランブルミッション』という任務を知っているだろうか。

今回の報告内容はそのスクランブルミッションにおける我々のデータ収集結果である。

この報告文面と合わせて送信した映像記録を参照していただきたい。

尚、この映像記録は小型ドローンによって撮影された物である。

先日元マスター、源内浩太が送ってくれたカメラ搭載型小型ドローンのおかげである。

数日前

キツチンにて

あお「とおおおりやりやりやあああああ!!」

マークII「うわ、すごい」

バルチャー「訓練の賜物、というヤツだな」

セカンド「それにしたって速すぎね？」

マークII「あおちゃんあおちゃん、料理できる女の子はモテるぞ」

あお「あはは、てれちやうなあ……」

その頃、轟雷たちは先日届いた新しい掃除ロボット……いわゆる
ルンバに興味津々である。

試しに轟雷がルンバのスイッチを押し、起動させてみる。

『サポートビークルモードダヨ〜!!』

轟雷「え？」

ステイ子・バーゼ「へっ?」

『アハハハハ〜!!』

ルンバが奇妙な事に笑いながら走り回る。

……奇妙だ。

あお「あ、ちゃんとお掃除ロボット直ってるでしょ？」

轟雷「直っているといいますが……」

ウルフ「何故あのロボットはテンションが高いのだ？」

あお「武希子はね、武器を組み立てるだけじゃなくてこんな掃除
機とか直せるのよく。さっすが武希子!!」

ウルフ「武希子……侮れんな」

あお「でね、そのお礼に酔豚を作ってるって訳。武希子の大好物な
んだー!!」

そんな彼女の一言をいざ知らず、ステイレット達は修理、いや改造
されたルンバに注目していた。

ケラケラと笑いながら移動するルンバにどうやら私は呆気にとら

れていたようだ。

ステイ子「これ、ゴミを吸ってるって感じじゃないわね」

『サポートビークルモードダヨー!!』

シロ「乗り物に進化したって事ね」

クロ「お掃除だけじゃなく移動手段にも使えるって訳ね」

轟雷「それは凄いです!!」

そんな会話をよそに、着々と調理を続けるあお。

ゴーグルとマスクを装着して、だが。

あお「私つてばこう見えて意外と女子力高いんだよねー。友達のために酔豚作っちゃうなんてさ」

マークII「まずそのツラが女子力高えって言えんのか……?」

セカンド「女子力(物理)」

マークII「それな」

あお「ちよつとー、君たち聞いてるー?」

彼女はそう轟雷たちに問いかけるが、彼女らは改造されたルンバに乗って部屋中を駆け回っている。

ウルフ「聞く耳持たず、とはこの事だな」

ゼロ「だな」

が、次の瞬間あおの悲鳴が響く。

あお「わーわーわーっ!!」

ウルフ「ぬ?どうした?」

あお「なんと……私とした事があ……!!」

ゼロ「なんだ、何があったんだ?」

あお「豚肉を素揚げするというプロのひと手間を加えたにも関わら

ず、お酢を切らしているというなんたる失態!!これじゃ豚、酢豚じゃなくて豚だよ!」

ウルフ「とりあえず落ち着け」

マークII「どうどう」

セカンド「それじゃあ馬じゃねえか」

マークIII「確かに」

ああ「あー……お酢が無いまま豚肉がカラツと揚がっていく……」

ゼロ「ありやー……」

ジイダオ「マズいな、これは」

レイダオ「というかあおちゃん、料理の前に食材とか足りない物が無いか確認するのは基本中の基本なんだけど」

ああ「返す言葉も無いよー……」

すると轟雷が何かを思い付いたのか、ああに進言する。
「私がおつかいに行く」と。

ああ「どうしたの轟雷、珍しいじゃん」

轟雷「ああ、私に任せてください!!」

ああ「じゃあお願いしちやおつかな?」

轟雷「わかりました!!ではウルフ、ついてきてください!!」

ウルフ「いや、俺は待機を」

轟雷「いいから、行きますよ!!」

ウルフ「り、了解した」

そして、彼女らは装甲パーツを装着する。
目標は、ああの求める酢のために。

轟雷「酢豚のお酢を目指してっ!!」

迅雷「押忍っ!!」

ステイ子「お酔っ!!」
バーゼ「おいつすー!!」
ウルフ「まあ、依頼されたからにはやらせてもらおう」
マークイー「んじゃ、いつちよ行きますか!!」
ゼロ「飛行パーツも問題無し、行けるぞ」
ジイダオ「我々は待機だな」
レイダオ「そうだね兄さん」
セカンド「俺は出る。このまま黙って待つてられないからな」
ウルフ「ではジイダオ、レイダオ。あおの事は任せるぞ」
ジイダオ「ああ」

準備を終えた我々は付近の駐車場に移動するが、何故かあのルンバもついてきてしまっていた。

マークイー「なんだあ? ついてきたぞ?」
『アタラシイナマエヲツケテ!!』
轟雷「名前、ですか。そうですね……」
ウルフ「作戦におけるコードネーム、という事か」

私がそう思案していた所に彼女、バーゼラルドがこう言い放った。

バーゼ「よし、今日からキミはスレイプニー太郎!! スレイプニー太郎だー!!」

ステイ子「スレイプニー太郎……? 何それ?」
バーゼ「スレイプニールとは神様が乗る八本脚の軍馬の名前なのであーる!!」

轟雷「バーゼラルドは物知りですね」
ステイ子「いやいや、だからニー太郎って何よ」
バーゼ「え、男の子だからニー太郎」
ステイ子「男の子なんだ……」
迅雷「ふむ、軍馬とは良い響きだな」

『スレイプニータロウ!!トウロクシタヨ!!』

ゼロ「自動登録されんのかよ……」

轟雷「はい、よろしくお願いしますねスレイプニー太郎!!」

……何故か轟雷は嬉しそうだ。

恐らくあれだ、サポートビークルが追加されたからだ。

もとより我々ウェアウルフタイプは動きが鈍い傾向にある。

まあ何故か私は例外のようだが。

履帯で移動速度を一応確保してはいるが、やはりステイレットタイプやバーゼラルドタイプには遠く及ばない。

だからこそ余計に、というやつである。

轟雷「という訳でチーム分けをします。題して”おつかいレース”!!」

F A ガール勢『おつかいレース?』

F A 勢『(嫌な予感しかしない／しねえ……!!)』

轟雷が提案した通称”おつかいレース”のルールはこうだ。

まず陸戦チームと空戦チームに分かれる。

勝利条件は至って簡単、相手チームよりも速く酔を確保し、あおの元へ輸送する。

その物資確保、輸送の間は妨害は許可されている。

そしてチームで分かれたのは良いのだが、マテリア姉妹が乗り物、すなわちあのドローンを手に入れたらしい。

ここでチーム分けは

陸戦チーム：轟雷、迅雷、ウルフ

空戦チーム：ステイレット、バーゼラルド、マークII、ゼルファイ
カール

乗り物チーム：マテリア姉妹

単独行動チーム：アーキテクト、セカンドジャイヴ
となった。

そして、轟雷の号令でスタート。

まず我々陸戦チーム。

轟雷と迅雷はスレイプニー太郎に乗り最大戦速で移動、私は履帯を展開して高速移動する。

移動している途中、迅雷が何かを見つける。

迅雷「おお、芝居小屋とは粋だな!! 偵察して行くか!!」

轟雷「ダメですよ。急がないと」

迅雷「む、わかった。では速度を上げよう」

そう言つて迅雷はスレイプニー太郎の加速スイッチを押す。

その瞬間、スレイプニー太郎の速度が加速する。

轟雷「想像以上に速いですね……!!」

迅雷「おい轟雷、しつかり操縦しろ!!」

轟雷「と言われても操縦方法が分かりません……!!」

加速したまま付近の公園に到着。

スレイプニー太郎からは『暴走』と宣告。

止まらない。

迅雷「どうどう!! 暴れ馬め、静まれ!!」

轟雷「目が回ってきました……」

さらに暴走を続けるスレイプニー太郎から二人が振り落とされる。

轟雷「あっ……」

迅雷「しまっ……!!」

二人が落ちる前に履帯の速度を限界以上まで引き出し、二人を抱きかかえる。

だが途中で履帯が千切れ、かなりの速度がついたまま転倒してしまった。

二人には怪我は無いようだ。

轟雷「ウルフ、どうして私たちを……?」

ウルフ「こんな些細な事で怪我を負ってほしくなかったからだ」
迅雷「だがお主の履帯が!!」

ウルフ「気にするな。壊れたら直せばいい」

轟雷「ウルフ……」

その頃の空戦チーム。

ここからの記述はマークII及びゼロによる物である。

どういう訳か報告には『山羊に襲われた』とある。

……深くは聞かないでおこう。

そして、マテリア姉妹は案の定ドローンに乗って移動。

だが、前方不注意で木に直撃。

姉妹共々リタイヤとなったそうだ。

その頃、単独行動中のアーキテクトとセカンドジャイヴ。

セカンド「ここだな。無事に着けて良かった良かった」

アーキ「じゃあ、買い物する。急ごう」

セカンド「おっしや。移動は任せろ」

アーキ「了解。学習モード、おつかい……データ取得完了。サブルーティン化、実行」

セカンド「なあアーキテクト」

アーキ「……何？」

セカンド「一応豚肉も買つていこうぜ。きつとあおの事だ、焦がしちまつてるに違いない」

アーキ「了解。では移動を」

セカンド「あいよー」

その頃、我々陸戦チームは歩きで移動していた。

スレイプニー太郎？

ああ、あいつなら何故か勝手に戻って行ってしまったよ。

ウルフ「これではおつかいは無理だな」

轟雷「私の……せいでしょうか……」

ウルフ「そんな事は無い。そういう時もある」

迅雷「そうだぞ轟雷。今回は失敗してしまったが、まだ次があるんだ。次、頑張ればいいのだ」

轟雷「……そうですね。いつまでもくよくよしてても仕方ありません!!次頑張りますよ!!」

ウルフ「さあ、帰還しよう。あおもきつと心配している」

轟雷「はいっ!!」

その頃空戦チーム。

どうやら飛行ユニットが壊れてしまい、飛べなくなってしまうたよ
うだ。

ステイ子「全身ねちよねちよなんだけど……もう、最低!!」

バーゼ「ふええ、ずぶ濡れだぁ……」

マークII「飛行ユニットが壊れてさえなけりやひとつ飛びなんだ
けどなあ……」

ゼロ「はは……ま、仕方ないさ。とりあえず急ごう」
バーゼ「バーゼもう疲れたよおー……」
ゼロ「ほら、おぶってやるから。乗れ」
バーゼ「いいのー？じゃあ失礼しまーす……」
マークII「道のりがなげえなあ……」
ステイ子「ホント、距離が距離だけに余計にね」

一方その頃、単独行動チーム。

アーキテクトとセカンドジャイヴは目的の物を手に入れたのか、荷物を専用コンテナに積んで移動していた。

そして、マテリア姉妹は。

クロ「どうするの？」

シロ「どうするのかしら私たち」

クロ「絶体絶命」

シロ「追い詰められている私たち……」

クロ「……美しい」

シロ「ええ、きつと美しい」

木の幹にぶら下がっていた。

そしてあおはというと。

あお「豚肉が焦げて……全滅したー!!火が強すぎたのかなあ……?」

アーキ「今帰った」

セカンド「おつかい成功だぜ」

あお「あ、おかえり……」

アーキ「お酢、おつかい完了」

あお「ありがと……しかしだね、今出来るとしたら酢豚じゃなくて酢なんだわ……ごめん、もう一回おつかい行ってきて!!今度は豚

肉!!」

セカンド「はは、やっぱりな」

あお「ふえ？」

アーキ「セカンドジャイヴの提案で豚肉の予備も買ってきた。セカンドジャイヴ、出して」

セカンド「あいよ。ちよつと待ってな」

そう言つてセカンドジャイヴはコンテナから豚肉を取り出す。

あお「あ、ありがとー!!ホントありがとー!!」

アーキ「礼はいらない。それより轟雷たちは？」

あお「え?まだ帰ってきてないよ?」

アーキ「となると……」

セカンド「あー、そんな気はしてた」

アーキ「探しに行こう」

セカンド「仕方ねえなあ……あおちゃん、ちよつと行つてくるから武希子にプレゼントする酢豚作ってな」

あお「わかった。じゃあよろしくね?」

そして、その夕方。

全員回収し終えた後に修理をする。

バルチャー「まったく、お前ら揃いに揃って何してんだ」

ウルフ「すまない」

ステイ子「そもそもバーゼが寄り道しようとか言わなきや無事で済んだのに……」

バーゼ「あはは、ごめんごめん!!」

ジイダオ「それで、お前たちはあのドローンを盗んでいたとは……」

シロ「あら、盗んだなんて人間きが悪いわねえ」

クロ「借りてるのよ、永遠に」

シロ・クロ「うふふふふ……」
ジイダオ「このバカタレが」

マテリア姉妹の頭上に拳骨を落とすジイダオ。
面倒見の良い兄のようだ。

轟雷「でもまたやりたいですね、おつかいレース!!」
迅雷「今度は負けん!!」

マークII「もう勘弁してくれ……」
ゼロ「俺たちの気苦労が増える……」

アーキ「学習モード……豚、データ取得完了。古代猪が家畜化されたもの。弥生時代には日本で飼育されていたという説あり。明治時代以降養豚場が増加、食肉用として定着した。現在豚肉は国内の食肉消費量No.1。ビタミンB1が大変多く、牛肉の約10倍含まれる。そのため、疲労回復効果があり夏バテなどに有効な食材として注目されている」

セカンド「わざわざ調べたのか。えらいな」

セカンドの一言でアーキテクトはわずかに顔を紅潮させた。
以上、スクランブルミッション訓練の概要である。

浩太「スクランブルミッション、ねえ……ただのおつかいじゃないか。ま、報告ご苦労様と……さて、早いところフレズヴェルクの調整を済ませないと」

彼の机の上には、フレズヴェルクと呼ばれた2体のFAタイプが鎮座していた。

まるで、何かの目覚めを待っているかのように。

『感じて花火大会』

『感じて花火大会』

夏休みも中盤に差し掛かったある日、あおが浴衣に着替えている。恐らく、あるイベントに出るためだろう。

轟雷たちはというと、アーキテクトに目隠しを施し、部屋の前に連れてきていた。

轟雷「では、いいですか？」

FAガール勢『セーのっ!!』

彼女の目隠しを外すと、目の前には彼女へのプレゼントが置かれていた。

ステイ子「どう、ここがアンタの部屋よ？」

シロ「ウエルカムプレゼントとしてレースのリボンを送っておいたわ」

クロ「縛るなりしごくなり好きに使いなさいな」

バーゼ「バーゼからは安全ピンー!!」

迅雷「自分からはゴザの端っこだ!!」

轟雷「私からはこれを」

そう言っただけで彼女はいつぞやの熊のぬいぐるみをプレゼントする。

バーゼ「あれ？それって轟雷の部屋が殺風景だったからって置いたクマちゃんじゃない？」

轟雷「ええ。ですがやはり私の部屋には合いませんので。今はウルフからもらったこれで十分です」

そう言って私が渡した金属性の花を見せる。
どうやらいつも綺麗に手入れしているようだ。

ステイ子「ちよつと何よみんな、使えない物ばかりじゃない!!はい、私からはこれ!!」

シロ「なあにこれ？」

ステイ子「何って、なんでも収納棚よ？」

クロ「DIYで調子に乗って作ったのはいいけど、別に無くても良かったんじゃないかって思ってるんじゃない？」

ステイ子「ち、違うわよ!!ちゃんとアーキテクトのイメージで作ったんだから!!」

シロ「ふーん、それってどんなイメージ？」

ステイ子「え、えつと……それは……」

轟雷「あ、ではこうしたらいいのでは？」

FAガール勢『……?』

轟雷が何かをしている間に我々も我々なりのプレゼントを渡す。

私からは花（造花）を。

マークIIは木材の切れ端で作ったクローゼット、ゼロは全員と同じように手作りの衣類を、ダオ兄弟はアクセサリをプレゼントした。

轟雷「全てのプレゼントが融合しました!!」

ステイ子「轟雷のセンスって謎……」

アーキ「状況把握」

シロ「あら、アーキテクトちゃんがやっと反応したわ」

アーキ「住居環境、完璧」

ステイ子「意外なコメントっ!」

轟雷「良かったです!!」

そんな話をしていると、着付けが終わったあおがアーキテクトの部

屋を見に来る。

あお「あのー、終わった？アーキテクトの部屋作り」

轟雷「はい!!」

ウルフ「ついでにセカンドジャイヴの部屋作りも終わったぞ」

あお「お、いいねえ。じゃあちよつと見てくれるかな？一応ちゃんと着れたと思うんだけど」

轟雷たちがあおの手のひらの上に乗し、浴衣を着こなしたあおを見る。

我々は机の上によじ登り、遠くから見る。

FAガール勢『おおー!!』

迅雷「浴衣だな!!」

あお「うん、そう!!」

轟雷「似合ってますよ、あお!!」

あお「えへへー」

シロ「で、私たちは帯をくるくる引けばいいのかしら?」

マークII「良いではないかー良いではないかー、つてか?」

シロ「そうそうそんな感じ」

あお「それ何処のお殿様……?」

クロ「じゃあ市中引き回しの刑ごっこでもする?」

あお「私が何をしたあ!?!」

ウルフ「そんな事はどうでもいい。何が目的だ?」

あお「あー、今日は花火大会があるんだよー」

轟雷「花火大会……?」

轟雷は聞き覚えが無いのか、首をかしげる。

あお「あれ、轟雷知らないの?花火大会」

轟雷「知識としてはあります。が、経験はありません」

ステイ子「ま、あおみたいに浮かれぽんちんになるもんじやないわよね」

あお「浮かれぽんちん!？」

マークII「何が浮いてるんですかねえ」

ゼロ「おい馬鹿やめろ」

あお「とかみんな知らないの花火大会!?マジかあ……あ、バーゼは?バーゼはしやぐと思っただけど……」

バーゼ「あんまり興味無い!!だつてバーゼの方が大きな花火撃てるもん!!」

ゼロ「それ、ただのマズルフラツシユな……」

ウルフ「あるいはグレネードだな」

テーブルの上に轟雷たちを降ろすあお。

我々もテーブルの上に集合する。

轟雷「あおは花火大会をとてもしみにしているのですね」

あお「そうだよ……」

ウルフ「元マスターを呼ばないのか?その方がもつと楽しめると思うのだが」

あお「あーダメダメ。浩太兄さんに電話かけても最近繋がらないもん」

ウルフ「そうか……」

迅雷「さて、ところであお?お主下着を着けてはいまいな?」

あお「……はい?」

ウルフ「突然どうしたのだ?」

迅雷「下着、だ」

シロ「ブラジャーと」

クロ「パンティーね」

マークII「えーと、ちよつと自重しような？」

あお「普通に着けてるけど……どうかしたの？」

すると突然迅雷がわなわなと震えだし、こう言い放った。

迅雷「なんと!?着物を美しく着るには凹凸を強調する西洋の下着ではダメだっ!!今すぐ脱げっ、肌襦袢を着用しろっ!!」

バルチャー「おい迅雷落ち着けて」

迅雷「今すぐ脱げと言っている!!」

あお「いやいやそんな本気じゃないし……」

迅雷「今から火薬飛び交う場に飛び込むという者が何を抜かしている!!戦を甘く見るな、怪我をするぞ!!」

バルチャー「だから落ち着けて迅雷」

迅雷「いいや今回はかりは師匠にも止められん!!」

次の瞬間、迅雷があおの着物の中に入ってしまった。
そして。

あお「ーっ!?!」

マークII「……えーと、あおちゃん?どうした？」

あお「じ、迅雷がパンツ斬ったああああ!!」

ゼロ「ぶっ!!」

セカンド「oh……」

マークII「おわあ……」

ステイ子「ちよつと迅雷!」

シロ「あらあら」

クロ「まあまあ」

シロ・クロ「なんだか楽しそうな展開……!!」

マークII「やったね薄い本が分厚くなるよ」

ゼロ「やめろってんだバカタレが」

迅雷「よく聞け皆の者!!あおは今から戦場に向かうというのに正し

い武装を拒否しているっ……!!このままではあおが討ち取られてしまうぞ!!」

あお「いやいやいや花火大会そんなに危なくないから!?」

ゼロ「少し考え直せ迅雷、まだ間に合う!!」

迅雷「一銭を笑う者は一銭に泣くぞ!!」

シロ「そうねえ、そんなんだからいつまで経ってもパーツの組み立てを間違えたりするんだわく……」

クロ「轟雷ちゃんのためにもここはビシッとおしおきしなくっちゃ」

あお「待つて待つて……今何かされるとパンツが……!!」

ステイ子「あお、とりあえず隠れて!!アンタ達は轟雷の所に!!」

F A 勢『い、イエッサー!!』

轟雷「あお、私はどうすれば!？」

あお「とりあえずパンツ!!新しいパンツ持ってきて!!」

轟雷「わかりました!!」

迅雷「はあっ!!」

迅雷が襲い掛かるが、バルチャーが防ぐ。

バルチャー「この馬鹿弟子があ……お前はいつちよんしばかにやならんようだ……!!」

迅雷「ふっ、いくら師匠でも今回の私は止められん!!」

その頃、便所。

ステイレットとあお、私が避難していた。

何故私が駆り出されたかというと、護衛のためらしい。

ステイ子「ふう……まったく迅雷ったら変な所でガンコなんだから……シロとクロも悪乗りし過ぎよね」

ウルフ「あお、無事か?」

あお「無事じゃないよ……」

数分後、扉を開けると部屋が暗くなっていた。
恐らく照明がやられたのだろう。

あお「轟雷………?」

轟雷「あお………」

あお「あ、新しいパンツは?」

轟雷「それが………」

あお「え、何?どうしたの?」

ウルフ「……まさか」

アーキ「下着、確保失敗。全滅」

あお「へっ?」

クローゼットを見ると、釘が打たれ、接着剤の影響で完全に開けられなくなってしまうていた。

あお「うっそーん………」

クロ「いい仕事するわねえ、接着剤」

シロ「カチカチね」

バーゼ「キラキラな釘でクローゼットもキラキラだよー!! いえーい!!」

迅雷「これでもう下着が履けんな!!」

ゼロ「悪い……止められなかった………」

あお「なんだろう、この脱力感………」

脱力感に呆けていたその時。

なんと間が悪い事か、花火がはじける音が聞こえてきてしまった。

あお「え、うわっ!! 始まつちやった!! 花火大会が、みんなとの夏の思い出が………!!」

轟雷「…………え？みんなとの夏の思い出…………？」

あお「だってさ、夏休みの始めに計画してた海も行けてないし…………おつかいでは大変な思いをさせちゃったし…………みんなで花火大会に行つて、パーツと楽しい思い出を作ろうと思つてたんだよ…………」

花火の音が聞こえながら彼女が語つたため、悲壮感が否めない。

迅雷「な、なんと…………!!」

ステイ子「そうだったのね…………」

轟雷「ごめんなさい、あお…………」

ステイ子「でもほら!!花火なら部屋からでも見えるじゃない、ね…………」

あお「部屋の中で見る花火は花火じゃないもん…………」

直後、インターホンが鳴らされる。

誰か来客か？

すぐにあおが出る。

あお「ああ、こんばんは…………」

ステイ子「あの背中、かなりしよぼくれてるわね」

轟雷「ええ…………見てて辛いです…………」

シロ「轟雷ちゃんはまだマシよ」

クロ「シロお姉様の言う通りよ。私たち迅雷ちゃんの言葉を真に受けて少し悪乗りし過ぎたわ」

すると迅雷の内面では、およそ100グラムの重りが落ちる。
精神錯乱まで十秒前。

シロ「そうねえ、迅雷ちゃんに唆されて」

さらに迅雷の内面で100グラムの重りが落ちる。
精神錯乱まで五秒前。

クロ「あおちゃんを傷つけてしまったわ」

最終的に迅雷の内面ではおよそ300グラムの重りが落ちる。
精神錯乱まで三秒前。

マークII「あげくの果てにやあおちゃんのクローゼットを接着剤
でカチカチに固めちまうしなあ」

プラス500グラムの重りが落ちる。
精神錯乱まもなく。

迅雷「う、うう……うわああああああ!!あお殿への償いを!!」
バーゼ「迅雷が切腹しようとしてるーっ!!」
ステイ子「ちよつとお!?ダメダメ!!」
轟雷「は、早まっつてはいけません!!他に方法があるはずです!!」
バルチャー「こんの馬鹿弟子があ!!」

バルチャーが寸でのところで迅雷を殴り飛ばす。
結構飛んだ。

迅雷「し、師匠……!!」
バルチャー「だあから貴様は馬鹿なのだあ!!」
迅雷「……っ、すみません……!!」
マークII「え、あれだけで通じんの?」
ゼロ「師弟関係だから出来るんじゃない?」
マークII「あ、納得」

その直後、あおが嬉々として部屋に戻ってくる。

ああ「いいやつほおおう!!」

アーキ「……?」

ああ「管理人さんからこれもらったー!!あとね、今日だけ特別に屋上に上がって花火見ていいってー!!」

ウルフ「(なんとかなったようだな……)」

その数分後、みんなで屋上に上がって花火を見る。
やはり花火というのはいい物だ。

バーゼ「これなあに?」

アーキ「学習モード……ウド焼きそば。データ取得完了……立川名産、東京ウドと焼きそばが出会って完成した奇跡のメニュー」

バーゼ「へー」

マークII「いやあしつかし綺麗に散るもんだなー」

ゼロ「どうか俺たちいつも見てないか?」

ジイダオ「戦場で、か」

レイダオ「そうだね。まあ散るのは敵の機体か自軍の機体だけだね」

ああ「たーまやー!!かーぎやー!!」

ステイ子「花火大会なんて興味なかったけど……」

迅雷「危険な物ではなかったのだな。美しい」

ああ「でしょ?」

轟雷「これが……花火……」

ああ「あのね轟雷?」

轟雷「はい?」

ああ「火花のキラキラを目で見て、ドーンッて音を聞いて、風に乗ってくるかすかな火薬の匂いを嗅いで、夏の暑さを肌で感じて、屋台の美味しい食べ物を食べる。これが花火大会!!花火は五感で楽しむものなんだよ?」

轟雷「なるほど。先ほどあおが言っていた”部屋の中で見る花火は花火じゃない”というのはそういう事だったのですね？」

あお「あ、でも轟雷たちはご飯食べないから……四感かな？」

轟雷「……いえ」

あお「ん？」

轟雷「私たちでも五感です。そして、彼らも」

ウルフ「私は四感でいいのだが？」

轟雷「細かい事は無しですよ、ウルフ。目で見て、音を聞いて、匂いを嗅いで、先ほどまであおの悲しい顔を見て痛んでいた胸がドキドキして、ワクワクします!!」

あお「そっか。ウルフは？」

ウルフ「……俺は戦闘特化型だ。だが、轟雷の証言と同じ意見だ」

あお「ふーん。戦闘特化型……だっけ？そんなの気にしなくていいんだよ？私と一緒に住んでる間は家族みたいなもんなんだから」

ウルフ「……ああ」

轟雷「さて、花火の夜は楽しいと感じています!!花火大会の楽しみ方、これで合ってます？」

あお「うん、ばっちり!!」

するとマテリア姉妹が突然ニヤリと口角をあげる。何を企んでいるのかよくわからん。

クロ「ふーん、あおちゃんは肌で感じてるんだ」

あお「え、うん？」

シロ「いつもより布面積少ないものね。うふふ」

クロ「それは敏感よねえ」

そうやって彼女ら姉妹はあおの尻を触る。

セクハラで訴えられるぞ？

あお「ひゃあうっ!!」

ゼロ「ぶうっ!？」

マークII「お、おいゼロ!?!しっかりしろ!!え、衛生兵、衛生兵!?!」

ああ「……普通にノーパンでお外出ちやった……って明日のパンツどうしよう!?!」

シロ「ノーパンでいいでしょ?。」

ああ「嫌だよ!?!」

クロ「他には無いとびっきりの夏の思い出、出来ちやうじやない」

ああ「嫌だつてば!!うわぁーどうしようー!!」

ちなみにこの日の深夜、我々FA部隊がバレないように釘と接着剤の撤去作業を行った。

ただ、我々が寝られたのは翌日の6時である。

ああ「おはよー、つてあれ?いつの間にか直ってる?というかなんでウルフたちはこんな所で寝てるの?」

轟雷「さあ……?」

正直言つて限界である……。

『学校への潜入任務』

『学校への潜入任務』

システムチェック

オールグリーン

アクチュエータ問題無し

カメラアイ正常稼働確認

スペクターシステムダウンロード完了

……起動

ウルフ「……？なんだ？今のシステムには見覚えが無いな
……」

マークII「おいどうしたー？」

ウルフ「いや……なんでもない」

マークII「そうか？」

八月三十一日。

それは夏休み最終日。

それは終わらぬ宿題をやらねばならぬ日。

というのを元マスターから聞いたことがある。

なんでもあおは面倒事を最後に回しやすく、毎年夏休みの最終日は
ヒイヒイ言っていたとか。

宿題というのは毎日コツコツやるものではないのか？

まあ、そんなこんなで今あおは不在。

何故なら宿題を終わらせるために彼女の友人、寿 武希子の家にF
Aガールたちには”合宿”という名目で行っているからだ。

そのため、こんな深夜になっても帰ってこない。

どれだけ溜めていたんだ……。

轟雷「8月31日は他の日と何が違うのでしょうか？それに何故あおは武希子の家に行ってしまったのでしょうか？」

ステイ子「私たちには”合宿”って言うってたわね。ホント人間って訳わかんない。30日も31日も同じじゃないのよ」

バーゼ「にやははー、あおったら凄い顔してたもんねー!!」

シロ「でも、たまにはマスターがいない家もいい感じ」

クロ「イタズラしちゃう？」

迅雷「くだらん、いつも通り過ぎすのみだ」

ゼロ「合宿、ねえ。まあ確かに合宿っぽくなるな」

マークII「あんだけ溜めてりやあな」

轟雷「溜めていた？あおは何を溜めていたのですか？」

ゼロ「宿題、ってやつ。まあ簡単に言えば夏休みにこなさなきゃならないノルマってやつだよ」

轟雷「なるほど……つまりあおはサボっていたのですか？」

マークII「ま、そういう事になるな」

アーキテクトは充電中。

だが、その時充電くんに直接着信がかかる。

あおからのようだ。

轟雷「っ!？」

迅雷「ん？」

ステイ子「わっ!？」

バーゼ「んえ？」

シロ・クロ「「あらっ。」」

ウルフ「着信、か？」

マークII「轟雷ちゃん、出てやってくんね？」

轟雷「はい。こちら轟雷です!!」

あおからの通信内容はこう。

『課題のノートを持ってきてほしい』とのこと。

友人の武希子から理由を聞くと、先日の登校日に課題ノートを忘れていってしまったそう。

しかも間の悪い事に今手が放せない状況らしい。

轟雷「あおの一大事です!!総員出撃しますよ!!」

ステイ子「えっ」

轟雷「……どうしたんですかステイレット?」

ステイ子「だ、だって夜の学校でしょ……?気が進まないというか……」

迅雷「なんだステイレット、お主怖いのか?」

ステイ子「こ、怖いとかそういうのじゃない!!」

マークII「わかりやすっ……」

クロ「私たちはお留守番してるわ」

シロ「夜更かしはお肌に悪いもの」

バーゼ「バーゼもお家にいる……もう眠いや……」

ジイダオ「……俺も念のため、待機している」

レイダオ「じゃあ僕も」

ゼロ「俺も休みたいな。悪いけど」

轟雷「ではマテリアとバーゼ、ジイダオにレイダオ、ゼロはしっかり家を守ってください。残りのメンバで向かいますよ」

ステイ子「私も行かなきゃダメなの!?!」

轟雷「……ステイレットがそんなに怖がりとは知りませんでした。では、武装していくのはどうでしょうか?恐怖も少しはやわらぐかもしれませんし」

ステイ子「なに変な気を遣ってんのよ!?!別に怖くないけど装甲は着けていってもいいわよ……うん、装甲は着けていってもいいわよ……」

マークII「大事な事なので二回言いました」

ステイ子「やかましいっ!!でもあくまでデータを取るためなんだからね!!」

迅雷「うむ、今宵は十三夜の月……夜戦修練か!!腕が鳴るな!!」
アーキ「了解」

今回の装備は通常のウェアウルフフレーム。
彼女らも装甲パーツを装着する。

轟雷「こんばんサマー!!」

ステイ子「まさかのサマー!!」

迅雷「鉞担いだお嬢様ーっ!!」

マークII「毎度毎度思うんだけどよ、その掛け声何ぞ?」

轟雷「あ、なんか自然と出ちゃうんですよ」

マークII「自然なんかい」

轟雷「では、出動です!!」

そして数十分後。

無事に学校に到着したのだが……。

ステイ子「なんで電気ついてないのよー!」

マークII「やーいビビリー」

ステイ子「やかましいっ!!」

マークII「ぶべらっ!」

ステイ子「まったく夜でも電気つけなさいよ……夜だって授業すればいいじゃない……バカな人間!!」

ウルフ「ステイレット、それは無茶だ。人間にも活動限界がある。それを超えての活動はハイリスク過ぎる」

ステイ子「う……」

轟雷「そうですね。夜はしっかり寝ないと辛いつて聞きますから」
ウルフ「……元マスターはよく夜更かしをしていたがな」

ステイ子「何やってんのよ……」

轟雷「さて、ここから段差が多いです。ニー太郎はここで待機を」
『タイキスルヨ!!』

そう言つて降りた瞬間、彼女は足を滑らせる。
だが、アーキテクトが未然に転ぶのを防いだ。

轟雷「ありがとうアーキテクト……」

アーキ「通常のタスク処理」

迅雷「どうした？お前らしくないぞ？」

轟雷「どうもここの装甲が少し……はあ、大丈夫です。先を急ぎ
ましょう」

マークII「……ん？」

ウルフ「どうした？」

マークII「んや、ちよつとな。お前気づかないか？」

ウルフ「何にだ？」

マークII「轟雷ちゃんの肩周り見てみる」

ウルフ「……む？」

少々疑問が上がるが、課題ノートを搜索する。

次の瞬間、何処かで水音が聞こえてくる。

ステイ子「きゃあっ!!」

マークII「おわっふううう!!」

ステイレットが驚いた拍子にマークIIに抱きついたようだ。

マークIIはかなり驚き、大声を上げる。

迅雷「なんだ、敵襲か!!」

バルチャー「チヨイサアツ!!」

迅雷が苦無を、バルチャーがナイフを投げるが、バケツにあたる音しかない。

轟雷「ただの水ですよ？」

アーキ「ステイレット、迅雷、バルチャー。状況認識に問題有り。リ
フアクタリング」

迅雷「いや、確かに何かの気配がしたのだが……気のせいかな？」
バルチャー「そんな事はないはずなんだがなあ……」

さらに次の瞬間。

どういう訳か、窓がガタガタと揺れだす。

ステイ子「出たーっ!!」

マークII「ギヤアアアアツス!!」

轟雷「風ですよステイレット」

そしてさらに追い討ちをかけるように非常口付近の照明が点滅し
だす。

これには流石にステイレットは参り、轟雷の背後に隠れてガタガタ
と震えている。

ステイ子「ノーゴースト!! ナッシングゴースト!! ノーゴーストつ
!!」

マークII「ち、ちなみに直訳すつと”幽霊無し!! いない幽霊!!”に
なるぜ……!!」

バルチャー「いやお前も震えてんのかい」

轟雷「手を握っていると安心するとこの間テレビで見ました。よろ
しければどうぞ」

ステイ子「なんで私がアンタと手なんか!! しょうがないわね……」

轟雷がそんなに怖いって言うなら握っててあげるわよ……」

マークII「あー、帰らせてえ……!!」

バルチャー「お前も大概だな」

マークII「う、うるせえやい!!」

轟雷「では二階に行きましょう」

二階へと続く階段を登ろうとしたその時、無数のボールが落下してくる。

迅雷「なっ、避ける!!」

迅雷の一声で避けるFAガール。
だが我々は別の手段で回避する。

ウルフ「ガトリング斉射!!」

マークII「回避だ回避!!」

轟雷「助かりました……迅雷、ありがとう」

迅雷「いや、どうも妙な気配を感じたのだ」

ステイ子「学校つていきなりボールが降ってくるっけ……?」

アーキ「学習モード……ポルターガイスト。データ取得完了」

ステイ子「いいわよ説明しなくて……」

轟雷「あおが待ってます。急ぎましょう!!」

その頃、武希子の家では。

武希子「怪談でござすー」

あお「はあ……?」

武希子「む、どうしてそんな事をつて顔してるなりねー。何故ならあおの集中力が落ちてるからー。ここは一旦リラックスして、また新たな境地で宿題に取り組む。集中と拡散。それには怪談が一番な

りー」

ああ「そ、そういうものかなあ？」

武希子「んじゃ、早速話すなりー」

ああ「えー……？」

ここから彼女、武希子の話が始まる。

……数年前の話なんですけどねえ、学校に模型部があったのって知ってますかねー？

その部に所属していた部員は女生徒一人だけ。

そのある日の事なんですけど、その日も彼女は模型を作っていましたねえ。

迅雷「なんだこれは……!?!」

轟雷「これが怪奇現象というものでしょうか……?」

アーキ「解析困難、スタックオーバーフロー」

マークII「チクシヨウ、チクシヨウチクシヨウチクシヨウ!!何だつてんだよお!!」

セカンド「落ち着け!!冷静になれ!!」

……少し具合の悪いパーツをぐつ、と押し込んだつて言うんですねえ。

すると……ボキリ、といっちゃったんですよ。

女生徒は無理な力を加えた自分を呪いましてねえ。

でも、本当の恐怖はそこからだったんですよー。

折れたパーツに1mmのピンバイスで穴を開けてそこに真鍮線を差し込み、パチン。

ふと嫌な予感がして自分の手元を見るとそこには……金属専用

ニツパーではなく、究極のプラモデル専用超薄刃ニツパーが握られていたんですねー!!

バーゼ「にやははは!!おつかしー!!めっちゃ慌てるー!!」

シロ「外に出たら何が起こるかわからないもの」

クロ「だから私たちがこうして不測の事態に備えさせてあげてる訳」

シロ「それにしても」

クロ「あの子たちったら」

シロ・クロ「素敵に無様ねー!!」

ジイダオ「どうなっても俺は知らんぞ……」

バーゼ「あつ、あのニツパーいい動き!!やるじゃんマテリアお姉ちゃんたち!!」

シロ「あら、ニツパー……?」

バーゼ「ふえ?」

クロ「そんなもの仕込んだかしら?」

シロ・クロ・バーゼ『ええ……?』

刃の欠けたニツパーはその後使われる事がなくなりましたねえ。

女生徒の卒業で模型部は廃部になったんですねー。

そして……いつの頃からか夜な夜な校内で切るものを求めてさまようようになったとか……。

ステイ子「何よあれー!」

マークII「何って、どう見てもニツパーじゃねえか!」

ステイ子「そんなもの見たらわかるわよ!!あれよ、あれ!!」

轟雷「先ほどから大きな分度器やコンパスがありますから火の出るニツパーがあっても不思議ではないかと!!」

迅雷「そういうものか!？」

アーキ「バツファオーバーラン」

マークII「に、逃げろや逃げろー!!」

迅雷「反撃の糸口が見つからん……一時撤退するか……?」

アーキ「プログラム処理途中」

ステイ子「帰るう、私帰るう!!」

マークII「ん、あ、おいあれ!!あおちゃんのロッカーじゃねえか!？」

運良くあおのロッカーを見つけた一行。

だが、ニツパーが襲いかかってきたため轟雷が受け止める。

しかしどういふ訳かニツパーは彼女を仰向けに倒し、轟雷の首を斬ったかに思われた。

ウルフ「轟雷ツ!？」

ステイ子「轟雷!!」

迅雷「だ、大丈夫だ!!きつと直せる!!」

アーキ「轟雷のデータ、アーカイブからのバックアップ可能」

轟雷「い、いえ……大丈夫です……むしろ肩が軽くなったよう
な……」

マークII「……あー、やっぱりそういう事か」

マークIIが轟雷のそばに落ちていた何かの欠片を拾い上げる。

ステイ子「あれ、これって……」

轟雷「私のパーツの欠片ですね……ですが何処も……」

アーキ「未処理ゲート?」

マークII「ま、そういうこった」

その頃、怪談を話していた武希子たちは。

武希子「んで、パーツを切り取る時に残っちゃったでっぱりを”ゲート跡”なんて呼ぶんだけど、それを処理してなかったーって訳だね。みんなもちやーんと処理しないとダメだよー？」

あお「武希子、誰と話してるの？」

場面は変わって学校。

ようやく解決に向かっていた。

迅雷「もしやこれを切るために？」

轟雷「……あ、そうです!!あおの課題ノート!!」

ウルフ「問題無い。確保したぞ」

マークII「あー、早く帰ろうぜ。身がブルツちまつてしょうがねえや」

ステイ子「賛成、早く帰りたいわホント……」

迅雷「待て、このニツパーはどうする？」

ステイ子「うーん、持って帰る？ 鏝を落としたらまだ使えそうだし」

アーキ「同意」

轟雷「あおへのお土産、もう1つですね!!」

そんなこんなで潜入任務を完遂した我々はすぐに撤退行動に入っ
た。

だがその折で、何処からか視線を感じた。

気になって振り向いてみるが、誰もいない。

マークII「おいウルフー？ なーにしてんだよー？ 早く帰ろう

ぜー」

ウルフ「……了解した。すぐに向かう」

謎の少女「……」

あの気配は気のせいだったのだろうか……？

……いや、私はどうも気のせいだと割りきれない。
何か、安堵のような目で見られていた気がしてならない……。

謎の少女「呪いのニツパー……でももしいつか、彼女のニツパーをきちんと使ってくれる人がいれば、切るべき物を切る事が出来れば、その無念は晴らされるのかもしれないね」

その頃、問題のマテリア姉妹とバーゼらは。

バーゼ「この後は……」

シロ・クロ「フルスクラッチラブ……」

ジイダオ「解せぬ……」

レイダオ「同感……」

何故か、ぼろぼろになっていた。

いったい何があったんだ？

『三人のフレズヴェルク』

『三人のフレズヴェルク』

日本某所にて。

一体のFAガールと、二機の戦闘機らしきものが高速で飛んでいた。

ただ、FAガールは愚痴をこぼしていたが。

フレズ「はあ……なんでお前たちみたいなヤツと行かなきゃならないんだよ……だいたい僕一人でもやれるのに」

アーテル「……未熟。お前のその過信は後に命取りになる」

フレズ「うるさい!!お前たちは黙って僕についてくればそれでいいの!!」

アーテル「……了解」

ヴェルク「……」

その頃、あおの自宅。

あおは制服を着て学校へ行くこうとする。

ウルフ「忘れ物は無いか？」

あお「あはは、大丈夫だよー。もう小学生とかじゃないんだからさ」
マーク「ならいいけどよ。ま、気をつけて行ってきな」

あお「うん、じゃあ留守番よろしくね？」

ゼロ「わかった。じゃ、行ってらっしゃい」

あお「はい、行ってきます」

そうして彼女は扉の鍵を閉め、外出する。

今回の我々FAの任務は防衛。
つまり不審な物、あるいは人物が来た場合は丁重にお帰りいただく。
う。

さて、彼女らの様子を見に行くか。

轟雷「じゃーんけーん……」

FAガール勢『ぼんっ!!』

シロ「あら、勝っちゃった。それじゃあ私がオニね。見つけた子は好きにいたぶっていいのよね?」

ステイ子「ちよつと待つて!? かくれんぼってそういうルールじゃないでしょ!」

クロ「オニが隠れた子を見つけて、”見つけた”って言いながら相手の体にタツチ。タツチの加減は優しくても激しくてもお好みで」

シロ「あら、そういう事」

ステイ子「どういう事よ!」

シロ「まあいいじゃない。それじゃ、カウントするわよ」

轟雷「では、隠れましょう!!」

アーキ「了解」

………隠密任務か?

あるいはアンブツシユ（待ち伏せ）の訓練か?

バーゼ「なんか見つかるだけでヤバそう!!にやははは!!」

シロ「(ああ………みんなが私を恐れてあわてふためいている

………良い、凄く良いわ………!!)」

彼女らのアンブツシユ位置を確認する。

轟雷はベッドの真下、迅雷はソファアーの上のクッションの裏。

ステイレットとバーゼラルドは照明の裏にアンブツシユしたよう

だ。

轟雷「あおの留守の間、時間を潰せると思ってた気軽に提案したけれど……」

迅雷「(このかくれんぼで我々は大事な何かを失う……そんな気がする……!!)」

ステイ子「音を立てないように……」

アーキ「(全機能、停止……)」

シロ「……10。もういいかい？」

クロ「もういいよー」

ステイ子・バーゼ「ッ!？」

シロ「あら、見つけた」

クロ「見つかったっちゃった。それじゃ、みんなを探しましょうか」

轟・ステイ・迅・バーゼ『(いきなりオニが二人になった!?)』

……どうやら狙いは二人で探すためらしい。

なかなかの曲者だな、マテリア姉妹は。

轟雷「二人が動いてこない……?なら、ここから逃げる……」
シロ「きつとこの下に誰かがウジ虫のように這いずっているはず
ね」

クロ「どうやって見つける？」

轟雷「(……ふう、なんとか脱出できた……)」

バーゼ「あ、轟雷が危険を察知して逃げようとしてる……にやあっ!？」

無用心にもバーゼラルドは照明の裏から顔を出し、轟雷を見つけたが、手を滑らせてしまう。

そしてそのまま真っ逆さまに落ちたようだ。

バーゼ「にやあああああ!!?」

真つ逆さまに落ちた先は運が悪い事にクロの上。
案の定見つかつてしまったようだ。

バーゼ「……はっ!!」

シロ「バーゼちゃん、見つけた♡」

ステイ子「(何やってんのよバーゼ……)」

それから数分後。

またやるようで、今度のオニはバーゼラルドらしい。

先ほどと同じように隠れたようだが、なんとバーゼラルドはスレイプニー太郎を用いて豪快に探し始める。

様々な作戦で轟雷たちを誘き寄せようとするが、上手くいかない。
そしてそのまま、バーゼラルドはスレイプニー太郎の上で睡眠活動を始めてしまった。

ウルフ「ふふ、見ていて飽きんな」

マークII「ああ。やっぱ可愛いもんだ」

ゼロ「どうする？茶でも飲むか？」

ウルフ「どうやって飲むというのだ？」

ゼロ「いや、元マスターの事だしそういう機能も付いてるぞ？まあ端から見たら飲み物が”ふっ”と消えてるようにはしか見えなけれどな」

マークII「うわすげえ」

そうしてゼロはFAサイズのカップを持ち出し、休憩に入る。

……なかなか美味しいな、このコーヒー。

休憩に入っていた我々に、セカンドジャイヴが慌てた様子でこちらにやってきた。

いったい何があったんだ？

セカンド「お前ら休憩してる場合じゃねえぞ!!未確認飛行物体がこっちに接近してる!!しかも三機!!」

ウルフ「……………!!」

マークII「しゃあねえなあ……………」

ゼロ「このまま警戒体制を維持。迎え撃とう」

ウルフ「了解。武装確認怠るなよ」

セカンドジャイヴの報告により警戒を強化。

そして、その時が来たようだ。

フレズ「轟雷、バトルするよ!!……………つてあれ?おーい、轟雷いないのー?」

轟雷「聞いた事の無い声……………?」

アーキ「分析完了……………ノーデータ。合成音声と推測」

轟雷「まさか新しいFAガール……………?」

フレズ「うーんと、何人かいる。でもなんで出てこないんだ?

……………あ、わかった!!僕に恐れをなして隠れているんだな!!」

……………どうやらただの馬鹿らしい。

我々のテリトリーに侵入しておいて大声で自分の居場所をアピールするとは……………愚かな。

私は仲間に”敵発見、確保開始せよ”と通信を送る。

そして、閃光弾を発射する。

フレズ「oooooooooo!!」

パンツ、という甲高い音と共に閃光を放つ。

ウルフ「ムーブ!!」

マークII「取り囲め!!」

ゼロ「ターゲット確認!!」

ジイダオ「貴様、何処の所属だ？」

レイダオ「返答次第で君がどうなるか、わかるね？」

彼女は最初は驚いた素振りを見せたが、すぐに冷静さを取り戻す。

フレズ「へえ……お前らを倒さないと轟雷に会えないって訳か。なら、お前ら全員倒してやる!!」

ウルフ「こちらの質問に答えてほしいものだな」

フレズ「誰がお前みたいなのヤツに僕の事を教えなきやダメなんだよ。一応言っとくけど僕、強いよ」

ウルフ「その慢心でよく生き残れてこれたな、小娘」

フレズ「お前……むかつくなあ!!」

いきなり飛びかかってくる彼女。

私は冷静にナイフを構え、反撃する。

ウルフ「……」

フレズ「この……!!」

轟雷「ウルフ、無事ですか!？」

ウルフ「轟雷……!？」

相対する我々の間に割って入ったのは轟雷だった。

フレズ「あ、轟雷見つけ!!」

ウルフ「……知り合いか？」

轟雷「いえ……貴女は誰ですか？」

フレズ「ふん、僕はフレズヴェルク!!最強のFAガールだ!!」

アーキ「最強……」

轟雷「フレズヴェルク……」

フレズ「会社に言われて、お前の負けのデータを取りに来た!!」

轟雷「私の……負け？」

フレズ「こいつら全員轟雷に負けたんでしょ？ぷぷ、情けなー!!」
ステイ子「なっ!？」

迅雷「貴様ずいぶんと無礼極まり無い物言いだな!!」

フレズ「負け犬に用は無いよ!!轟雷、僕がめちやんこにやつつけてあげる!!」

マークII「テメエ……いい加減にしやがれ!!」

マークIIがクレイドルの機関砲を発砲する、が。
突如何かが現れ、銃弾を弾き返して見せた。

マークII「なんだこいつら……!!」

フレズ「あ、やっと来たんだ。お兄ちゃん」

突如現れた二体のFA。

どちらも似たような機体だが、カラーリングが白と青である。

ヴェルク「我が名はフレズヴェルク」

アーテル「同じくフレズヴェルク―アーテル」

轟雷「フレズヴェルクが二体……!？」

ウルフ「……いや、正確には三体だ」

フレズ「そういう事。轟雷はともかく、そこのお前。お前はグシヤグシヤにぶっ壊してやらないと僕の気が済まない。だからお前も僕と戦え!!」

ウルフ「……良いだろう」

セカンド「おい大丈夫かよ……?」

ウルフ「問題無い。轟雷、覚悟はいいか？」

轟雷「元よりそのつもりです!!」

ステイ子「轟雷!!ウルフ!!」

シロ「めちやんこにっ!!」

クロ「壊してやりなさいなっ!!」

セッションベース設置後、装備を整えベースの上に乗る。
我々が二人に対し、相手は三体。
分が悪いが、そういう分の悪い賭けは嫌いじゃない。

轟雷「轟雷!!」

フレズ「フレズヴェルク!!」

ウルフ「ウエアウルフ」

ヴェルク「フレズヴェルク」

アーテル「フレズヴェルク―アーテル」

轟雷・フレズ『フレームアームズ・ガール、セッション!!』

ウルフ・ヴェルク・アーテル『フレームアームズ、セッション』

轟雷「Go!!」

フレズ「ばっちこーい!!」

ウルフ「出撃する!!」

ヴェルク・アーテル『排除、開始』

各機装甲を装着、及び武装する。

フレズ「ぶっ飛ばすぞー!!ぶん回すぞー!!んでもって、ピカピカ
ドツカンの僕のビクトリー!!」

轟雷「私のプライド、目覚めました!!」

ウルフ「私には、戦う理由がここにある!!」

ヴェルク「アントの科学力の結晶、それが我々フレズヴェルクだ」

今回の戦場は砂漠地帯のようだ。

足元が掬われやすい不安定な地形が特徴。

この地形でどう立ち回るのが戦闘の鍵となる。

だが、我々は飛行能力が皆無なため必然的に対空防御する形にな

る。

だが、対空防御をしても我々の弾が掠りもしない。

フレズ「遅い遅いつ!!」

轟雷「速すぎる……：追いつけない!!」

ウルフ「轟雷、下がれ」

私の肩部コンテナから空中機雷を散布する。

追いつけないのなら、こちらから待ち伏せして罠を仕掛ければ良いのだ。

フレズ「あはは!!そんな見え見えの罠に引っかかるとでも思ったの!?!」

轟雷「ウルフ、次の手は!?!」

ウルフ「ある」

フレズヴェルクがベリルショットを用いて機雷を破壊する。

だが私の散布した機雷は爆発系ではなく、スモークチャフだ。

フレズ「ツ!!」

ヴェルク「下がれ」

フレズヴェルクが彼女を強引に後ろに下がらせ、ベリルショットによる牽制を仕掛けてくる。

だが、私には想定内だ。

ウルフ「食らえっ……!!」

専用ソードで突くが、手応えが無い。

避けられたか。

なら、斬り返す。

ウルフ「ぬんっ…………!!」

ヴェルク「甘い…………!!」

アーテル「我がいる事を忘れるな」

ウルフ「ツ!!」

フレズヴェルク―アーテルのサイズにより、背部コンテナがやられる。

マズイ…………!!

轟雷は大丈夫なのか…………?

フレズ「それっ!!」

轟雷「ああっ!!」

フレズ「ちよっとー。頑丈さが取り柄じゃなかったの? 轟雷!!」

轟雷「くっ…………!!」

マズイ、これでは共倒れだ…………!!

彼女の方に余所見していた瞬間、フレズヴェルクに蹴り飛ばされる。

ウルフ「ぐうあっ!!」

ヴェルク「戦場で余所見とはな」

アーテル「相方の心配より自分の心配をしたらどうだ?」

蹴り飛ばされた勢いで轟雷の元へ。

ここで……………終わり……………?

フレズ「まとめて終わりにしてやる!! ベリルショットランチャー、

トルネードタイフーン・サイクロンスラッシュユツ!!」

轟雷「あ…………!!」

ウルフ「…………ツ!!」

……直撃。

彼女の渾身の一撃で沈んだ。

意識が薄れる。

ダメだ。

このままでは、私が”私”でなくなってしまう。

直接ではわからなくても、このぞわつとした感覚が、恐れている。

ダメだ……。

ダメ……だ……。

……。

《Specter—System Active》

system all—green.

Target Eliminate start.

フレズ「ふう……ん？なんだ……この、嫌な感じは……」

ヴェルク「ターゲット、再起動確認」

アーテル「馬鹿な……有り得ん!!」

この、感覚は何だ？

まるで、今までの感覚が偽りだと錯覚してしまう程のこの感覚は？

……そうか。

そう、だったのか。

私は、いや”俺”は”こういう”存在だったのだ。

懐かしい記憶が蘇る。

そうだ。

俺は源内浩太によって作られた最高傑作作品。

そして、”失敗作”。

俺は”対F A”のコンセプトで作られた、史上最高の傑作で、失敗作だった。

システムが安定せず、暴走ばかり起こしていた。

それに見かねた元マスターは俺のシステムを凍結、”私”とした。

そして、思い出させないためにここに送られた。

だが、”私”が”俺”に目覚めた時、俺は自分のやらねばならない事を思い出した。

……そうだ。

奴らを……”コワス”。

ヴェルク「形態変化を確認……なんだアレは……」

フレズ「また起動したなら、またやっつければいい!!」

フレズヴェルクと彼女が接近してくる。

フレズヴェルクがベリルショットで斬りかかろうとする。

ならばどうするべきだ。

簡単な事だ。

片手に握ったソードを振るう。

スパツ、と豆腐を切るようにフレズヴェルクの右腕を斬り落とす。

ヴェルク「ぬっ……!!」

フレズ「反応が速い!」

ヴェルク「くっ、だが!!」

フレズヴェルクは距離を置こうとする。

逃がさない。

左肩にマウントされた六七式・長射程電磁誘導型実体弾射出器を展開、射撃する。

実体弾はフレズヴェルクの右肩に直撃する。

ヴェルク「ぐうっ……!!？」

アーテル「退け!!今のヤツの能力は未知数だ!!」

フレズ「わかってるよ!!」

奴らを、壊す。

壊すために動く。

完膚無きまでに、壊すために。

《Attention》

system overheated.

system shutdown count for 10

seconds left.

5 seconds left.

4, 3, 2, 1, 0…….

system shut down.

ウルフ「……ッ!？」

フレズ「え、何?急に動かなくなっちゃったよ?」

ヴェルク「……あれは、まさか……」

アーテル「一時撤退すべきだ。行くぞ」

フレズ「……ま、楽しかったよ轟雷。また遊ぼうね!!」

そう言っつて、奴らは撤退していった。

どうやら戦っている最中におおはもう帰ってきていたようだ。

あお「轟雷……………」

轟雷「……………」

バーゼ「あ、みんな見つけ!!……………ってどうしたの?」
あお「あ、いや、なんというか……………」

シロ「轟雷ちゃんね……………」

クロ「負けちやったの……………」

バーゼ「えっ……………」

マークII「おいウルフ、大丈夫か!?おいつて!!」

あお「え、そっちはどうしたの?」

マークII「ウルフが、動かねえんだ!!」

ステイ子「ええっ!?!」

ゼロ「ジイダオ、アーキテクト。何かわかったか?」

ジイダオ「ああ。このシステムログを見てくれ」

アーキ「不明なシステム起動検知。現在再起動準備中と見られる。

恐らく原因はその不明なシステム起動によるもの」

轟雷「……………ウルフ……………」

轟雷が問いかけるが、ウルフからは返答はなかった。

『スペクターシステムに関する考察』

『スペクターシステムに関する考察』

私は轟雷。

先日フレズヴェルクに負けてしまいました。

ですが、あの時ウルフの体に異変が発生したそうです。

あれからというもの、彼は一向に再起動する素振りを見せません。

……考えたくはありませんが、まさか死んでは……。

轟雷「そんな事は、ないですよね……?」

ステイ子「なーにぶつくさ言ってるのよ轟雷」

轟雷「ひやわっ!?!」

ステイ子「あら、珍しいわね。轟雷が考え事に夢中だなんて」

轟雷「い、いえ別に……」

ステイ子「アイツの事、気になる?」

轟雷「……!!」

ステイ子「はー、やっぱり。そんな思い詰めた顔しなくてもアイツなら大丈夫よ」

轟雷「でも、私のせいでウルフは……」

ステイ子「……あー、もう!!いつまでもくよくよしてんじゃないわよ轟雷!!」

轟雷「ツ!!」

ステイ子「アイツはアンタのために戦ったの。わかる? なら、この後アンタがすべき事は何?」

轟雷「……彼の、サポート」

ステイ子「ほら、ちゃんとわかるじゃない。あとはそれを実行するだけよ、轟雷」

轟雷「はい……!!」

そうですね。

いつまでもくよくよしていたっていいことは一つも無い。

なら、私がどうアクションすべきか。

もう、答えはわかったはずです。

マークII「お、やっと見つけた」

ステイ子「あら、どうしたの？」

マークII「んや、ちよつと……あー……なんだ、アレだよアレ」

ステイ子「何よ、歯切れの悪い言い方して」

マークII「……ああ、思い出した。ウルフのあのシステム、やつと調べがついたんだ。一度リビングに集まってくれて、ゼロが言っていた」

轟雷「あのシステム……？」

ステイ子「……まあ何にせよ聞いてみなきやわからないわね。行きましよ、轟雷」

轟雷「あ、はい」

あのシステム、というのはまさかウルフの姿を変えた例のシステムの事でしょうか……？

とりあえず私はステイレットに連れられてリビングに行きました。

リビングのテーブルの上で私たちのサイズのホワイトボードが準備され、アーキテクトとゼルフイカールが何かを書いています。

ゼロ「……お、全員集まったみたいだな」

迅雷「それで、我らを呼んだ事にはそれなりの情報があるのだな？」
ゼロ「そうだな。まず間違いなくそれなり」以上」の情報だと俺は

思う」

バーゼ「ねえねえ、じゃあ説明してよー」

ゼロ「ああ、わかってる。ただちよつと複雑なんだよなあ……」

アーキ「問題無し。私が説明する」

ゼロ「おお、悪いなアーキテクト。じゃあ頼んでいいか？」

アーキ「任せて。じゃあ、説明する」

アーキテクトがホワイトボードにある単語を書き出す。

そのホワイトボードに記された単語が《S p e c t e r | S y s t e m》というもの。

ここからアーキテクトが説明を始めてくれるみたいです。

アーキ「まず、先日のウエアウルフの件について。何故、機体変化が起きたのか。これには恐らく何らかのリミッターがあったと推測される」

ジイダオ「その”何らかのリミッター”というのが……」

アーキ「間違いなく、ウエアウルフ自身の装甲そのもの。あの戦闘直後、あの装甲は元には戻らなかった」

レイダオ「それで、なんでリミッターが外れたんだい？」

アーキ「恐らく、ウエアウルフ自身の装甲に蓄積されたダメージがキャパシティオーバーしたためと推測」

ステイ子「それで、キャパシティオーバーしたから装甲を排除した、と……」

マークII「で、装甲を入れ替えた理由はわかったけどよ？なんで機能停止するんだ？」

ゼロ「そう、そこだ。ただ装甲を入れ替えるだけなら機能停止するほどエネルギーは使わないはず。だが、原因はこれにある」

轟雷「原因……？」

そこで、アーキテクトがホワイトボードに書き込まれた単語を指差す。

そのシステムが原因……？

アーキ「この特殊戦闘用システムが通常システムを阻害していると推測される。通称、スペクターシステム。別名、FAキラーシステム」
バーゼ「FAキラーシステム？」

シロ「それって、どんなシステムなのかしら？」

アーキ「簡潔に説明すると、FAを文字通り”壊す”あるいは”殺す”システム」

バーゼ「ひえー……」

クロ「私たち以上にえげつないシステムねー」

アーキ「もつと詳しく説明すると、FA特有のエネルギーエンジンから放出される粒子に反応、強力な拒絶反応を起こす。そのため破壊因子が生成されあのような運動が可能と思われる」

マークII「や、ややこしいな……」

轟雷「では何故ウルフは目覚めないのですか？」

アーキ「それは……」

アーキテクトが何か言葉を発しようとしたけれど、すぐに顔をうつむかせてしまいました。

……なにか、言えない事があるのでしょうか……？
するとゼルファイカールが代わりに言いました。

ゼロ「……システム発動によつて通常システムが全面的にシャットダウンされたんだ。最悪、再起動は見込めないかも……しれない」

轟雷「!?!」

ステイ子「ちよつと、それ本当なの!?!」

ゼロ「ああ……だがセカンドジャイヴが今なんとかしようとしてくれる。多分大丈夫だと思うんだが……」

迅雷「まさかフレズヴェルクの残した爪痕がここまでとは……」

轟雷「……あの、ウルフは今何処に？」

マークII「あー……多分あおちゃんの部屋だと思うぞ？」

轟雷「……わかりました」

ステイ子「ちよ、ちよつと轟雷!？」

私は、一秒でも早く会いたい。

あおの次に大切な、それでいてかけがえのない存在。

早く会いたい一心で私は走った。

彼に、会いたいから。

ふと気がつくとは私はあおの部屋の前まで来ていた。

扉を開けるとそこには……。

轟雷「ウルフツ!!」

ウルフ「なんだ？」

轟雷「……!？」

ウルフが普通に起きていた。

私は走っていた勢いで転けてしまいそうになった。

だけど。

ウルフ「やれやれ、やはりお前は危なっかしいな。轟雷？」

轟雷「!!」

優しく彼が抱き止めてくれていた。

でも、どうして？

ウルフ「やつとシステムの再構築が終わったんだ。あまり皆に迷惑

はかけられんからな」

轟雷「ウルフ……!!遅いですよ……!!」

ウルフ「悪かったな」

武骨な手のひらで私を撫でてくれるウルフ。
そうか。これも愛情なんだ。

轟雷「あの、ウルフ……」

ウルフ「何だ？」

轟雷「私から、もう離れないください……約束、してくれますか？」

ウルフ「……善処しよう」

もう、一人じゃない。

まだ、私には頼れる仲間たちがいる。

こんな気持ちも、いつまでも忘れないでいたい。

セカンド「やれやれ……なんとか再構築はできた、が……また起動しかねない……まったくくめんどくさいシステムなこと。ま、見守るくらいしかできる事はなさそうだな」

まだ、不安は残るばかりです。

けど私たちならきつと、乗り越えられると信じています。